

多様な

INTERNATIONAL

生きものを

FORUM ON DIVERSE

守り、

WILDLIFE

活かす観光

AND ECOTOURISM

地方の思いと地域経済の発展

講演録

2019・1・25 金 四谷区民ホール



公益財団法人

日本生態系協会

国際フォーラム

多様な生きものを守り、活かす観光

地方の思いと地域経済の発展

2019年1月25日(金)  
四谷区民ホールにて

主催 (公財)日本生態系協会

後援

内閣府、総務省、環境省、国土交通省、全国知事会、全国市長会、全国町村会  
経団連自然保護協議会、(一社)日本旅行業協会、NPO法人タンチョウ保護研  
究グループ、(公社)土木学会、日本観光研究学会、日本国際観光学会、観光ま  
ちづくり学会、余暇ツーリズム学会、NPO法人日本エコツーリズム協会、(公社)  
日本ナショナル・トラスト協会、(公財)埼玉県生態系保護協会、日本ビオトープ  
管理士会

## 目次

講演者プロフィール	4
開会挨拶・趣旨説明 (公財)日本生態系協会 会長 池谷奉文	6
祝辞 衆議院議員 坂井学氏	10
祝辞 参議院議員 公明党環境部会長 竹谷とし子氏	12
来賓挨拶 観光庁 長官 田端浩氏	13
来賓挨拶 環境省自然環境局 局長 正田寛氏	15
特別講演	
「トキ・ツル・コウトリ 外国人旅行者にとって日本の自然は最高!」	16
国際ツル財団 行動創設者 ジョージ・W・アーチボルド氏	
リレートーク	
「サステナブル・ツーリズム ドイツと日本から印象を語る」	26
駐日ドイツ連邦共和国 大使 ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン氏	
「地域と自然とともに取り組む観光振興」	32
全日本空輸株式会社マーケティング室 アクション部長 藤崎良一氏	
「アウトドア7つのミッション」	38
株式会社モンベル 代表取締役会長 辰野勇氏	
「自然と共存する観光 北海道アウトドアガイドの役割」	42
北海道経済部 観光振興監 本間研一氏	
「自然と共生した地域づくり ～生物多様性の『ゆりかご』とくしま～」	48
徳島県 政策監 福井廣祐氏	
総括 東京都市大学 特別教授 涌井史郎(雅之)氏	54

## 講演者プロフィール

国際ツル財団 共同創設者

ジョージ・W・アーチボルド氏

1946年、カナダのノバスコシア州ニュー・グラスゴー生まれ。1968年、ダルハウジー大学にて学位を取得。1977年、ニューヨーク州イサカのコーネル大学にて修士課程を修了。多くのツル類が危機的な状況にあった1973年、コーネル大学の学友と共に、ウイコンシン州バラブーに、ツルの研究・保護センターとして国際ツル財団を設立。その後45年にわたる献身的な努力により、世界のツルの保護大きく飛躍した。こうした功績が認められ、4つの名誉博士号、カナダ勲章(2012年)、世界自然保護基金の金メダル(2013年)などを授与されている。このほかナショナル・オーデュボン協会のラフキン賞(2013年)など、多くを受賞している。現在、京子夫人と共にバラブー郊外に暮らし、休日にはガーデニング、野鳥の飼育などを楽しむ。



駐日ドイツ連邦共和国 大使

ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン氏

1953年生まれ、2014年3月着任。マインツ大学にて経済学博士号を、キングズ・カレッジ・ロンドンにて国際関係論修士号を取得。1984年、ドイツ外務省入省。在ベトナム大使館(1987～90年)、NATO代表部(90～92年)、在パラグアイ大使館(94～97年)、在中国大使館(2007～10年)に赴任。ハンブルク大学平和研究・安全保障政策研究所(1986～87年)、英国王立国防大学(2003年)に派遣。また、連邦議会自由民主党会派にて、欧州政策担当を務める(2000～02年)。外務本省では、「日本におけるドイツ年2005/2006」準備室長(04～05年)、第一局長(11～14年)などを歴任。



全日本空輸株式会社マーケティング室

観光アクション部長 藤崎良一氏

1965年、福岡県福岡市生まれ。1988年、ANA入社。入社後、福岡支店で旅行代理店営業、成田空港、外部研究機関出向、AirDo出向、広報部、ベトナム支店長、ANAセールスを経て、2017年10月より現職。



株式会社モンベル 代表取締役会長 辰野勇氏

1947年、大阪府堺市生まれ。少年時代、ハラーのアイガー北壁登攀記「白い蜘蛛」に感銘を受け、山一筋の青春を過ごし、将来登山に関連したビジネスを興す夢を抱く。1969年にアイガー北壁日本人第2登を果たすなど、名実ともに日本のトップクライマーとなる。1970年、日本初のクライミングスクールを開校。1975年、28歳の誕生日に登山用品メーカー株式会社モンベルを設立。この頃から、カヌーやカヤックにも熱中し、

第3回関西ワイルドウォーター大会で優勝。以後、ネパール、北米、中米など世界中の川に足跡を残す。一方、1991年、日本で初めての身障者カヌー大会「パラマウント・チャレンジカヌー」をスタートさせるなど、社会活動にも力を注いできた。近年では、びわこ成蹊スポーツ大学客員教授や天理大学客員教授など、野外教育の分野においても活躍する。2011年に発生した東日本大震災では、阪神淡路大震災以来の「アウトドア義援隊」を組織し、アウトドアでの経験を活かした災害支援活動を自ら被災地で陣頭指揮する。趣味は、登山、クライミング、カヤック、テレマークスキー、横笛演奏、絵画、陶芸、茶道。



北海道経済部

観光振興監 本間研一氏

1959年札幌市生まれ。民間企業を経て、平成11年4月、北海道庁入庁。総合政策部知事室国際課長、同部新幹線推進室長、胆振総合振興局長などを歴任後、平成30年4月から現職。

徳島県 政策監 福井廣祐氏

日本大学農獣医学部獣医学科卒業。1979年、徳島県庁に入庁。動物や人の感染症対策、食品の安全対策などを担当。保健福祉部副部長、危機管理部県民ぐらし安全局長、県民環境部長などを歴任。徳島県環境整備公社理事長を経て、2017年7月徳島県政策監に就任。危機管理部、県民環境部、農林水産部を指揮するほか、2018年より、国際スポーツ大会推進統括本部長及び野生鳥獣対策統括本部長を兼任。危機管理対応や農林水産業の振興などのほか、環境保全や自然エネルギー活用の推進に至るまで、県政全般の幅広い施策の推進に取り組んでいる。獣医学博士。



東京都市大学 特別教授 涌井史郎(雅之)氏



神奈川県鎌倉市出身。造園家・ランドスケープアーキテクト。「景観十年、風景百年、風土千年」を唱え、人と自然の空間的共存をテーマに多くの作品や計画に携わる。「ハウステンボス」のランドスケーププランニングや「愛・地球博」における会場演出総合プロデューサー。今という時代を、「農業革命」「産業革命」に次ぐ人類第3の革命「環境革命」の時代と捉え、地球環境問題、とりわけ生態系サービス(生物多様性)を重視した、人と自然の共生を目指した持続的未來への戦略的方向を探りつつ、「地球は限りある囲われたエデン」とであると説く。岐阜県立森林文化アカデミー学長、なごや環境大学学長、国連生物多様性の10年委員会委員長代理、(公社)国際観光施設協会副会長なども務める。

## 開会挨拶・趣旨説明

### (公財)日本生態系協会 会長 池谷奉文



皆様、こんにちは。本日は、大変お忙しいなかを多数おいでいただきまして、ありがとうございます。また、開催に際しましては、内閣府、総務省、環境省、国土交通省をはじめ、多くの機関・団体よりご後援をいただきました。そして、観光庁長官の田端様にもおいでいただき、まさに、野生生物を活かしたこれからの日本の観光を考えるのにふさわしい場となりました。日本生態系協会を代表いたしまして、お礼を申し上げます。

私どもの協会は、自然と伝統が共存する美しい国、持続可能な社会をどうつくるかということを中心に大きな目標に掲げて活動しております。本日は、野生の生きものと観光をテーマに、これからの地方創生のあり方について、いろいろご提案申し上げたいと考えています。

地方創生の内容については、過去の政権によって様々な提案がなされてきました。今回の地方創生は、5年前の2014年に第二次安倍内閣が提唱したものです。いろいろなよいアイデアを盛り込み、取り組まれているところですが、全体を見回すと、大きな柱がひとつ欠けているように感じるわけです。それは観光です。

これからの日本の産業・経済にとって、大きな柱となるのは観光だと思います。今までの電気産業、自動車産業は、今後、多少なりとも落ち込むことが予想されるなか、それを補って日本経済の中心的な存在になるのは観光ではないかと思っています。

観光と言うと、現在は、東京、名古屋、京都、大阪、富士山といったゴールデンルート、つまり「伝統と文化」がその中心にあると言えるのですが、今後それにとって代わるのが自然環境ではないかと思うわけです。日本の国土は、端から端まで3,300キロメートルもあります。ここには大変な財産、観光資源がつまっています。では、具体的にどんなものが観光の対象となるか、その例を少しご覧いただきたいと思っています。

3,300キロメートルを北から行きますと、極東だけに生息している大変大きく美しいオオワシという野鳥がいます(図-1)。2メートルを超えるワシで、世界中から注目を浴びています。このオオワシだけでも、世界中から百万人以上の観光客が来てもよいと思うのですが、現実にはまだそれほど知名

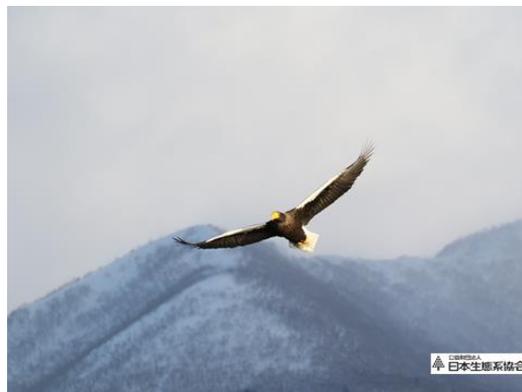


図-1

度が高くないので、現在の集客数は年間2、3万人程度です。それでもすごい数で、観光資源として期待できる素材です。

次はタンチョウです。美しい大型のツルで、体長は人間の背丈くらいあります(図-2)。畑地などを歩いている様子は、びっくりするほど美しいです。続いてエゾシカです。背景は国後島で、こうした環境で見るエゾシカは大変美しく、観光には抜群の素材と言えます(図-3)。シカは今駆除の対象になっていますが、単に駆除するのはなく、観光にも十分利用できるものだという認識する必要があります。これはイノシシについても同様です。多くの方々は野生のイノシシを見たことがないわけですから、イノシシも観光の対象となり得ます。

これはシマフクロウです(図-4)。世界で最も大きいフクロウの仲間、これに睨まれるとぞっとするようなすごい興奮を覚えます。このように素晴らしい鳥が日本にもいるのです。これはシャチです(図-5)。このシャチも日本としては大きな観光資源となります。

次はガンです。毎年、数万羽が日本に渡って来ます。大きな群れがすごい羽音を立てて田んぼから飛び立つ様子はまさに圧巻です。

コウノトリもいます。日本では一度絶滅させてしまったコウノトリですが、野生復帰を果たし、現在、全国にかなり広がっています。これも大変美しい鳥で、観光に十分役立ちます。町にコウノトリが一羽いるだけで、地域を活性化してくれる素晴らしい鳥



図-2



図-4



図-3



図-5

です(図-6)。続いては、トキです(図-7)。このトキも一度絶滅させてしまいましたが、中国からいただいて増やすことに成功しました。今は主に佐渡にいますが、全国に広がっていったときには、この鳥も大きな観光の素材になるだろうと思います。

鳥ばかりではなく、昆虫も観光資源になります。これは桶が谷沼のアカトンボです。こうした昆虫もひとつひとつが大変貴重で、今後重要な観光資源になっていくはずで、それからこうした小鳥類。日本には全国の市町村にこういった美しい小鳥がかなりいるのですが、いることすら知られていない状況です。これらも観光に大変役立つ生きものです。

先ほどタンチョウの話をしました。こちらは九州の鹿児島島にいるツルです。ただ、これだけ数が集

まるといろいろな問題が出てくるので、全国に分散させる必要があります(図-8)。分散をすることで、全国でツルが見られるようになれば、新たな観光の要素となるだろうと思います。

これはツシマヤマネコです(図-9)。こうした哺乳類もきちんと守って活かせば、大きな観光資源になるものです。これは沖縄のヤンバルクイナ。ご覧のとおり、かわいそうに、自然のなかではなく道路を走っています(図-10)。自然の生息地全体を守って、それを見せて観光に役立てるのが望ましいですが、なかなか難しい状態です。そこで施設で見せるということを行なうわけです。ただし、日本ではとかく、施設を造ることに力を入れてしまいがちです。もちろん、施設での展示も全てが悪いわけ



図-6



図-8



図-7



図-9

ではないのですが、やはり本来の自然をどう見てもらうか、その技術が大変重要になると思います。世界にはその辺りのことを大変うまくやっている国や地域が多くあります。

ヨーロッパやアメリカでは、国や地方政府機関も、「観光」を重要な資源として取り扱っているわけです。近隣の韓国もそうです。とくに韓国の順天(スンチョン)市などでは、日本にも来るナベヅルを中核として、観光客を呼び寄せています。自然を目的にこの町を訪れる人の数は年間約200万人。このことは、今後の日本、また地方創生において、大変重要な意味を示すものであります。こちらが市内にある自然を観察する施設なのですが、大変うまくできています(図-11)。皆さんも順天市に行って、是非ご覧いただければと思います。

観光については日本でも重要視しており、本日は田端観光庁長官がおいでくださり、私どもとしても大変ありがたいと思っております。今年、この観光庁が発足されて10周年の節目の年です。こういったなか、大変重要な役割を担うのが観光資源に精通した観光地域づくりの専門組織であるDMOです。こうした組織の司令塔をつくる必要があるのではないかと考えます。今までは、歴史・文化というものを、観光の中心に据えてやってきました。しかし、これからの観光は自然環境が中心ということ

になってきます。そうしたなかで、司令塔をどうつくるかが、今後の日本の大きな課題になるわけです。

自然環境を楽しむために、観光客が集中して何十万、何百万人と訪れたのでは、自然環境そのものに影響が出るのが予想されます。資源である自然を破壊してしまっただけでは意味がないわけですから、この影響をどう和らげるかが重要な課題となります。これからは、自然を消費する観光から、自然を再生する観光にシフトしていく必要があります。日本の場合には、自然環境が猛烈に少なくなっていますので、守るだけではなく、再生する必要があります。観光の力を利用して、観光で得た収益で自然を再生する、それをまた観光に役立てる、そういった循環が必要だろうということです。

フォーラムのテーマである「野生の生きものを守り、活かす観光」こそが、これからの日本経済の中核、または地方創生の中心的なものになるだろうと思います。今回のフォーラムが、自然という重要な資源を持続可能なかたちで活用することを通じて、これからの地方創生のあり方を考えるきっかけになれば大変幸いです。本日は、お忙しいなかお集まりいただきまして本当にありがとうございます。



図-10



図-11

## 祝辞

### 衆議院議員 坂井学氏



皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました衆議院議員の坂井学です。本日のシンポジウムの開催を心からお祝い申し上げます。

私は、20年くらい前に、日本生態系協会さんとのご縁をいただきました。その時、私は鳩山邦夫という議員の秘書をやっておりました。20年くらい前に都知事選挙に出たことを覚えていらっしゃる方もいるかもしれません。あの時の政策のキャッチフレーズは「自然との共生」でした。いろいろな方から、「こんなあやふやな、また人気のないフレーズで選挙が戦えるのか」と言われましたが、「自然との共生」とその先には、「経済成長がなくてもしあわせなくにづくり」と副題をつけて戦いました。私は、その政策をつくる責任者でした。その際に、いろいろなお知恵をいただいたのが日本生態系協会でした。そんな関係からお付き合いが始まっています。

私は、日本生態系協会をすごいなと思っています。それは、どんなにいいことを言っても、それが空理空論、単なる酒飲み話で終わってしまうては意味がない。具体的に政策に反映し予算をつけ、実行されて、我々の生活を変えていって初めて大きな意味をもつということで、地道な活動をされています。そのことに心から敬意を表したいと思っています。

そういう私が、平成25年に国土交通大臣政務官というお仕事をいただきました。担当がいくつかありましたが、そのうちのひとつが観光でした。

その年の12月に、はじめて日本を訪れる海外からの観光客の数が1千万人を超えました。それまでの最高が860万人程度でしたので、1千万人を超えるためのチャレンジをいろいろやっていました。今でも、観光業や観光に関わる方々とのお付き合いが続いています。

そういうなかで、今日のテーマ「自然と観光」について、いろいろと考えさせていただきますと、今流行のSDGsにしても、いろいろな環境問題にしても、私は一番大事なのは循環だと思っています。循環、まわることが大事です。一番分かりやすいのが、生態系の巡りであり、食物連鎖かもしれません。循環ということは、始めなければ終わりもない、つまりこれが持続可能性であり、継続性につながるわけです。ここが本当のポイントだと思っています。自然というのは、我々にとって大変魅力的です。それは我々も自然の循環のなかにいるからだと思っています。

政策やいろいろな国政の現場で話をしていると、ついつい、人間は自然を外から客観的に見ているような感じがします。けれども、私ども人間こそがその真ん中にいて、循環を促す一人であるべきだと思います。そこにいるからこそ、我々も自然を観たり、自然のなかに入ったりすることができる。そして、その時に多くを学び、癒しやエネルギーを得、リフレッシュするということを実感ができると思っています。

そういう点から考えますと、観光を推進していくうえで、ひとつ忘れてはならないのが、人間こそが最も大型な哺乳類で、そのため無闇やたらに自然のなかに入りますと、自然を破壊してしまう危険もあるということです。先ほどの講師のアーチボルド氏のお話にもありましたように、そこに注意をしながら自然の魅力を楽しむことが必要だと思えます。しかし同時に、自然を活かした観光は、地域の発展にもつながりますので、与党としても、うまくバランスをとりながら、多くの方々との共有を図りつつ、政府に働きかけていきたいと思っています。

今日は、様々なところからいろいろな方がお集まりということですが、この目標を掲げ共に進んでいくということで、我々も努力し、また応援もしたいと思っています。そのことを一言申し上げまして、ご挨拶いたします。本日はおめでとうございます。また、頑張ってください。

## 祝辞

参議院議員  
公明党環境部会長  
竹谷とし子氏



皆様、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました公明党参議院議員で、党環境部会長を務めさせていただいております竹谷とし子と申します。本日は、「多様な生きものを守り、活かす観光」というテーマでの国際フォーラムの開催、まことにおめでとうございます。海外からの観光客・旅行客が、昨年3,000万人を超えたということで、これまでのように銀座、新宿、秋葉原といった都会や、神社・仏閣といったような定番の観光から、次に行くところはどこかということをお求められるリピーターの方々もたくさんおられると思います。

今、始まる前に、本日ご講演をいただきますジョージ・アーチボルド国際ツル財団共同創設者とお話をしておりましたが、鳥というのも、日本にとって非常にポテンシャルのある観光資源であると教えていただきました。今、私は東京選出の議員をしておりますが、皆さん、三宅島というところに行つたことがありますでしょうか。東京のなかにも自然環境、また離島がたくさんございますけれども、この三宅島にはアカコッコという日本固有種の珍しい鳥がいます。他には鹿児島島のトカラ列島に生息しているということでございますが、その島に行つたときに、ヨーロッパからのお客様が、その鳥を見るために大変不便な場所ですが訪れていました。

また、私の故郷は北海道の知床半島に位置する町でございます。先程の池谷会長の写真にありましたオオワシ、オジロワシ、またツルがたくさんお

ります。そして、道路には「熊に注意」という標識がいたるところにあるような大自然のなかでございませう。ちょうどこれから流氷が流れてくる時期ですが、そこにオジロワシやオオワシが止まっているのを見るために、イギリスをはじめヨーロッパから、少なくない数の方々がやってきます。大変不便な地域ですけれども飛行機を乗り継ぎ、更にそこからレンタカーやバスに乗って来られるというのを、私の身近な場所でも見られるということです。

今日来られている皆様のなかには、自然環境や自然の生きものを守り維持をしていくために、ご貢献されている方々がたくさんいらっしゃると思います。これをこれから観光資源にと考えた時に、それをしっかりと守っていくためには、やはりどこからか財源、資金を捻出していかなければならないと思つているところでございます。これから予算審議も行われます。また、中長期的にこれを政策として大きな柱としていくためには、皆様のお声をうかがいながら、しっかりと国でも審議をしていかなければならないと思つているところでございます。

本日のフォーラムが大成功するよう、さらに皆様方が尽力されている自然と生きものを守り発展をさせていく事業が前に進んでいくよう、微力ではございますが、これから力を尽くしていきますことをお誓い申し上げまして、ひと言ご挨拶とさせていただきます。本日は大変におめでとうございます。

## 来賓挨拶

観光庁

長官 田端浩氏



ただいまご紹介いただきました、国土交通省観光庁長官の田端でございます。今日は、日本生態系協会主催のもと「国際フォーラム 多様な生きものを守り、活かす観光」が盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。また、本日まで参加の皆様方には、日頃より観光行政の推進に際して、ご理解、ご協力を賜っておりますこと、厚く御礼申し上げます。

我が国の観光を巡る状況としましては、日本を訪れる外国人旅行者の数が、昨年12月18日に初めて3,000万人を突破し、昨年1年間では3,119万人に達しました。これは、昨年と比較しますと250万人の増加で、2020年に訪日外国人旅行者4,000万人を実現していくという政府の目標に向けて、着実に前進しているところでございます。

最近の傾向として、外国人旅行者の訪れる先は、いわゆるゴールデンルートと言われるところから地方へ大きく変化しています。地方部における外国人の延べ宿泊者数は、三大都市圏の伸びを大きく上回り、2017年には全体の延べ宿泊者数に占める割合が初めて4割を超えました。

また、今や外国人旅行者の7割以上が個人旅行です。その旅行先も、旅行者一人ひとりの旅行目的に応じて全国各地へ広がってきております。そういう方々に日本で多く消費をしていただく、これが地域にとっての経済効果になるわけでございます。旅行消費額の拡大のためには、そうした一人

ひとりの旅行目的に合ったコンテンツの充実が必要になってまいります。

本シンポジウムの趣旨でも触れられておりますが、我が国は「気候」「自然」「食」「文化」という観光振興に必要な4要素が揃っている、世界でも稀な存在であります。「自然」に注目しますと、観光庁の調査によれば、外国人旅行者にとって「自然・景勝地観光」や「自然体験ツアー・農漁村体験」は満足した人の割合が90%近くと、外国人旅行者にとっては魅力の高い観光資源となっております。

こうした中で、観光庁では、日本の自然を活かしたツーリズムの魅力を広く海外に発信すべく、ICTの活用などによる先進的なデジタルプロモーションを実施してまいりました。また、環境省と連携して「国立公園満喫プロジェクト」の推進や国立公園内での多言語解説の整備に対する支援などを行ってまいりました。

日本は南北に長い国でして、地域固有種や渡り鳥を観察できることから、野鳥を観察することを目的に旅をするアビツーリズム(avitourism)が外国人にとって非常に魅力のあるコンテンツとなっており、これを活かしていくことが重要と考えております。本日のフォーラムのテーマは、まさにそういう方向性に合致をしているものだと思います。

観光庁といたしましては、自然資源を活用したツーリズムについてプロモーションを実施していく

こと、例えばイギリスなどで開かれていますバードフェアなどで発信していくなど、そういう取組を今後しっかり進めていき、日本に観光資源がたくさんあることを知っていただき、多くの方々に来てもらいたいと考えています。関係省庁をはじめ、産業界、各地域の方々、NPOの方々などとも連携しながら進めてまいりたいと思っております。

貴協会におかれましても、今後とも貴重な自然、健全な生態系を守りつつも、これらを活かした地域の観光振興にご協力賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、貴協会及び会員の皆様方の今後ますますのご発展、また、本日出席の皆様方のご健勝を祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



## 来賓挨拶

環境省

自然環境局長 正田寛氏



ご紹介いただきました、環境省の正田でございます。国際フォーラム「多様な生きものを守り、活かす観光」が、ここ四谷区民ホールにおいて盛大に開催されますことを、心よりお喜び申し上げます。

先ほど、たいへん美しい画像でご紹介いただきましたように、我が国には、ツキノワグマのような大型ほ乳類、タンチョウなどの大型鳥類をはじめ、多くの特徴的な生き物が生息しております。また、地域によっても多彩でございます。それぞれの生き物の生態が守られる中で、海外の方にもその魅力を伝えられる観光を促進することは、日本の野生生物に対する国内外の関心を高め、野生生物の保全と地域振興の両方につながるものと期待しております。

環境省では、2020年までに、国立公園への訪日外国人を1000万人とする目標を掲げ、情報発信の強化や景観の磨き上げ、快適な利用環境の整備など、国立公園の魅力向上を図る「国立公園満喫プロジェクト」に取り組んでおります。さらに、来年度からは新たに野生動物観光のコンテンツづくり推進に取り組むこととしております。

本日のフォーラムでは、長年、国際的なツルの保全に取り組まれてこられたアーチボルド博士が講演をされるほか、自然と共生する観光について、在日ドイツ大使のお話と、さらには国内の様々な企業や自治体の取組を伺えるものと承知しております。ご参加の皆様にとって実り豊かなフォーラム

となることを祈念いたしまして、私のご挨拶とさせていただきます。本日はご盛会、誠にありがとうございます。

## 特別講演

### ツル・コウノトリ・トキ

### 外国人旅行者にとって日本の自然は最高！

国際ツル財団 共同創設者

ジョージ・W・アーチボルド氏

本日は、お招きいただきありがとうございます。皆様の前でお話できることを大変光栄に思っております。そしてまた、農家の方々や、一般市民、政府関係者、NGO、自然を守る活動をされている方々、観光関係のビジネスをされている方々、そうした方々が長年努力をされて、日本の貴重な野生動物を守ってこられたということに対して、私は心から祝福したいと思います。私が日本に来るようになってから50年近くになりますが、来るたびに日本の皆さんは、私をととても歓迎してくれ、また、一緒に仕事をする中で非常に楽しい時間を過ごさせてくれました。そして、本日このような盛大な会を催された日本生態系協会の皆様に対しまして、ここでお礼を申し上げたいと思います。

私どもの組織、国際ツル財団は、世界中のツルの保護・保全のために献身的に努力をしている団体です。本部はアメリカ中西部のウィスコンシン州

というところがありますが、夏と冬、それぞれに素晴らしいところですよ。この施設ではツルを人工飼育で育てたり、放鳥して野生復帰したりする活動をしています。ここは一般の人にも公開されていて、近隣の学校をはじめ、世界中から訪問者が施設の見学に訪れます。施設内では、世界中のツル全15種が飼育されており、一般の人々もそれを見ることができるようになっています(図-1)。

ツルは世界中に15種しかいませんが、そのうち7種は日本で見ることができます(図-2)。他方、北米大陸には2種類のツルしか生息していません。この写真に写っている白いツルはアメリカシロヅルで、灰色の方がカナダヅル。個体数が世界で1番多いツルです(図-3)。

これはカナダヅルの様子です。春になると、彼らは泥を体に塗りつけてグレーからブラウンの色に変わります。これは子育てや巣づくりの際に外から見



図-1



図-2

えにくくするカモフラージュの意味もあるようです。カナダヅルは、世界中に70万羽以上生息しているとされています。北はロシアから、北米大陸のカナダ、南はキューバまで分散し、春の渡りのシーズンには、休憩地としてアメリカ中西部のネブラスカ州を流れるプラット川に2週間ほど滞在します(図-4)。ここには60万羽ほどのカナダヅルが集まり、世界最大のツルの渡来地になっています。こうしたツルの大群を見に、世界中から何万人という人が訪れます。

夜明けにねぐらから飛び立つツルたちの様子を見るというツアーも実施されています。観光のためとは言っても、ツルたちを驚かすことのないよう、観光客は、群れに近い位置に設けられたツルからは見えないようになっている施設の小さな窓から、ツルたちの様子を眺めます。早朝にもかかわらず多くの人が参加します。ツアー客が大挙して訪れてツルの行動を邪魔したり脅かしたりしないように、人

数や時間などを非常に注意深く管理コントロールしながら、同時に楽しめるエコツーリズムが確立されています(図-5)。ここは人里離れたところに位置していますが、その時期になると何万人もの観光客が来るので、何億円という利益になり、地元の自治体やコミュニティが経済的に潤います。

これに対して、アメリカシロヅルは個体数が少なく、1938年にはわずか18羽まで減り、ほとんど絶滅寸前まで行きました。このアメリカ大陸の中央部の塗られている地域が、アメリカシロヅルの分布域です(図-6)。分布域があるアメリカ中西部の地域は大草原地帯で、トールグラスプレーリーと呼ばれる背の高い草がびっしりと生えている見渡す限りの草原です。この地域は、19世紀にヨーロッパから白人が移住してきて開発を進め、全てと言ってもいいくらいのエリアを農業地帯に転換していったのです(図-7)。

こうしたことによって、アメリカシロヅルは激減し、



図-3



図-5

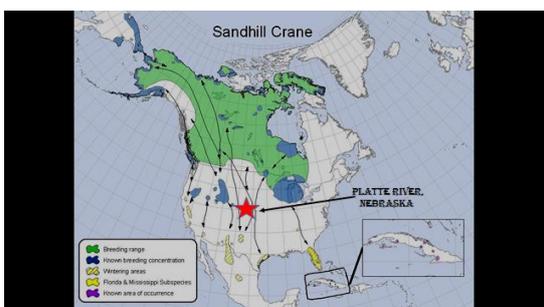


図-4



図-6

絶滅したと思われていました。しかし、1954年に、カナダの北方にわずかに生き残ったグループが発見されました。

アメリカシロヅルは、1回に2個の卵を産み、雛を孵します。2年目には1羽の雛だけを孵します。夏にカナダのウッド・バッファロー国立公園で繁殖したアメリカシロヅルは、そこから約3,000マイル(約5,000キロメートル)に及ぶ距離を南へ飛び、テキサス州のメキシコ湾岸近くのアランサス国立野生動物保護区で越冬します。アメリカシロヅルは、非常になわばり意識が強い鳥で、1ペアで約200ヘクタールほどの広さが必要です。なわばりを決めたら、その範囲に他のペアを寄せ付けず追い出す習性があります。この写真は、なわばりの主が、他のペアを追い出しているところです。このツルは動物食傾向の強い雑食で、この辺りではワタリガニや魚をとって食べています。大型の鳥であることから大量に食料が必要で、1ペアで200ヘクタールものなわば

りが必要になるのもそのためです。

1938年の絶滅寸前のところから、全米で保護活動が行われました。人工孵化や人工飼育、放鳥などの保護活動の結果、その数は徐々に増え、現在約500羽まで増えてきています(図-8)。テキサスの広大な湿地帯では、冬の期間、観光客がボートに乗って巣の近くまで行き、写真を撮ったり双眼鏡で見たりするエコツーリズムが盛んです(図-9)。ここでは、必要ないので人工的な給餌は行なっていません。ツルたちは、自分で餌をとりながら自然のままに生きています。毎年多くの人々がアメリカシロヅルを見にここに来ます。それによって、一冬で700万ドル(約7.7億円)以上の観光収入がこの小さな沿岸の町にもたらされます。

世界中を見ますと、ツルを象徴としたり大事にしたりする国は多く、ツル祭を催してツルの到来をお祝いする国も多くあります。これはブータンの例です(図-10)。ブータンでは、国をあげての大きなツ



図-7



図-9

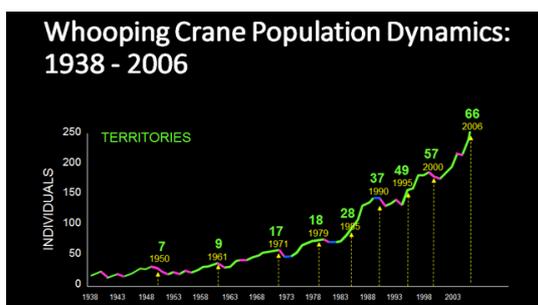


図-8



図-10

ル祭が行なわれています。全国の子どもや生徒たちが、それぞれに工夫した祭をつくり、集まってコンテストなどを行なっています。中学生、高校生が自分のつくった踊りを披露して、賞をもらうというようなこともやっています。ツルをテーマに絵を描いたり、作文を書いたり、スピーチをしたりして、子どもの時からツルを身近に感じる気持ちを育てており、一種の環境教育となっています。ご覧のように、こうしたイベントには何千人もの人々が来ますので、地元の経済も潤うということになります(図-11)。

ツルは、多くの地域で絶滅が危惧され、希少種になりつつあります。そのため、ただ守るだけではなく、一度絶滅した地域に再度戻すという努力がいろいろな地域で行われています。アメリカでは、絶滅危惧種のアメリカシロヅル回復の取り組みが行なわれています。これは捕獲した卵から孵った雛です(図-12)。人間は決して人の姿を見せず、白いツルのコスチュームを着て、雛たちを湿地に連れ



図-11



図-12

て行って餌をとることを教えたりします。手をツルの頭のように動かし、あたかも親鳥が餌をつつくように見せて、雛がそれを真似して自分で餌をとることを覚えさせるように育てています。こうすれば人間を全然見ないで育つので、大人になって他のツルを見た時に、それが自分の仲間だと自然に認識できるようになります。

アメリカシロヅルは長距離の渡りをする鳥ですが、人工的に育てた幼鳥は飛んだことがないので、渡りの仕方を知りません。そこで、人間が飛び方を教えます。それには超軽量の飛行機を使います。パイロットにツルのコスチュームを着てもらい、録音したツルの鳴き声を流しながら、飛ぶことを教えるトレーニングをしています(図-13)。

人工飼育で育ったグループを新しくウィスコンシンの五大湖の近くから、数千キロメートル離れたフロリダまで、超軽量飛行機で連れて行き、新しい生息地で育てるということを行ない、カナダのウッド・バッファロー国立公園とテキサスのルート他に、もうひとつのルートができました(図-14)。人間が片道のルートを教えると、ツルたちは全部覚えていて、帰りは人間の助けなしに、自分たちだけでウィスコンシンの方へ戻って来ます。私の意見ではありますが、このアメリカのやり方は、日本でも通用すると思います。北海道のタンチョウを新しい場所へ移して分散させることを皆さんが試みられているのであれば、北海道の他のところや本州のどこ



図-13

かへ連れて行くということも有効だろうと考えます。

空を飛べる鳥のなかで一番背の高いツルはオオヅルです。東南アジアやインドなどに多く住んでいます。オーストラリアとインドには、まだ個体数が結構いますが、インドシナ半島や東南アジア諸国ではだいぶ減って1000羽に満たないでしょう。とくにタイでは一度完全に絶滅しました。そこでタイの人たちは、絶滅したオオヅルをもう一度復元したいということで、動物園の中で人工飼育を行ない、成功しました。そして、近年は、人工飼育で育った幼鳥を、オオヅルがかつて多く生息していた地域に放鳥するという取り組みを徐々に拡大しています(図-15)。

タイでオオヅルが絶滅したのは、生息地だった湿地が潰されて田んぼや畑になったこともありますが、農薬の使用も影響していました。農薬をなるべく使用しないようにして、田んぼを湿地として、生息地の代わりとしてうまく使えば、オオヅルが回

復する条件は整います。田んぼをツルが生活できる餌場にするためには、農家の人たちの協力が必要です。農家の人たちに理解してもらい、そうした生息地が回復するような条件を整えてもらうには、社会的な活動も必要になります。

ツルを保護するための環境教育や農家に有機農業に転換する訓練をすることなどが、ツルと地元の人たちの両方の助けになっています(図-16)。農家の人たちに農薬をできるだけ使わずに、カエルや魚などが生きられる環境になるよう協力してもらうことで、そこにツルが来て、そこで収穫したお米が「ツル米」というブランド米として、普通の米より高値で売れることで、農家の人たちにも経済的な効果が出ています。

同様に、日本も3種の貴重な生物種の保全回復に素晴らしい成果を上げています。畑や田んぼで鳥たちが生きられるようなかたちに農業のやり方を改良したことで、タンチョウ、コウノトリ、トキの個体数が増加しています。北海道では、近年タンチョウが十分に増えたので、今は人工的な餌の量を徐々に減らしつつあります。

そうしたことを促進する理由は、1か所に大きな群れ集まっていると、病気などが発生した際に危険だからということがあります。本州の方にも分散できることを期待しています。さらに、北海道と本州の一部ということだけではなく、他の種類のツルも含めて、日本全国でツルの個体数を増やしてい



図-14



図-15



図-16

くということも将来的には可能だと思います。そのためには、2つの条件があります。

まず、元気な個体をできるだけたくさん放鳥するという。それから、個体数の増加や分散に備えて、それらが十分生きていけるよう、湿地などの良好な生息地をきちんと用意すること。この2つの柱が実現できないと分散もうまくいきません。

タンチョウは、現在北海道に1800羽くらいいます。これはツルのなかでも亜種だと思います。歴史的には、東北の青森などまで渡っていたという記録があるようです。越冬のために南の方まで行っていたようです。実際には主に北海道で生存・繁殖をしていました。それが現在、西へ少しずつ分散・移動し始めています。餌付けが開始される前は、ここで暮らしていたタンチョウの個体数は極めて少なかったようです。

ヨーロッパにおいて、農地の拡大にともなって湿地がどんどん潰されたように、アジア大陸、とくに韓国、中国でも同様のことが起こりました。主に朝鮮戦争があった時代から、中国の北の方では、農業開発が猛烈な勢いで進んで湿地などが潰されていきました。この図には、2つのグループの移動が示されています(図-17)。上海の郊外北部から移っているグループは600羽くらいいます。もうひとつグループは、ロシアのアムール川周辺地域から、北朝鮮、とくにその中央の非武装地帯のあたりに渡っています。そのグループの数は1,400羽くらい

です。

北海道のタンチョウは、皆さんの保護活動のおかげで目覚ましく回復して、今ではずいぶん増えてきました。これは、もちろん地元の人たちの絶え間のない保護の取り組みと、同時に、日本政府による資金援助もあって、長年の努力が実ってきたわけです。しかし、増えすぎて1か所に集まっているということは、一度伝染病などが発生すると、あっという間に感染しますので、これは分散させないと危険です。ここに居ついたらどこにも行かないという状況を改善するために、餌をある程度減らしているというわけです。

タンチョウは、1950年代初期には、わずか30羽くらいになりました。それが、地元の人たちによる、冬の間の給餌などの保護の取り組みにより、目覚ましい個体数増加につながり、1961年には200羽くらいまで増え、しばらくその状態が続いた後、また順調に増え始めました。順調に増え始めた1971年頃には、高圧線にぶつかって死ぬという例が出てきたため、黄色いチューブを目印として高圧線に付けてタンチョウがそこを避ける工夫をしました。それ以来、徐々に事故が減り、個体数は着実に増えていったと考えます(図-18)。2015年をピークに下降に転じたように見えますが、実は分散し始めたのです。そうすると、今度は散らばった数を正確に数えるのが難しくなりました。実際の個体数が減ったというより、数え方の困難さが数値を減らして

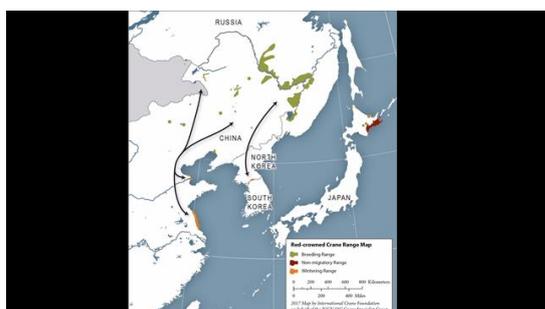


図-17

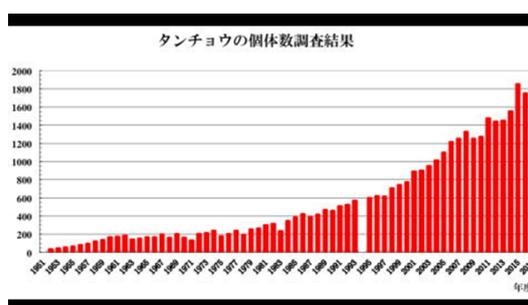


図-18

いるのだと思います。

タンチョウのような大型の鳥が生息するには、よい条件の広大な湿地が必要です。アメリカシロゾルも1ペアで200ヘクタールくらいのエリアが必要なので、それを100羽、1,000羽と増やすには、それだけ広大な面積の湿地が必要になる計算になります。ご覧のように世界中から、とくに欧米から、このタンチョウを見に北海道を訪れるエコツーリズムの観光客が増えています(図-19)。

これはインターネットから取ったデータですが、ツルを見に毎年、国内の日本人が3,000万、外国人が43万人、北海道にやってきて、千億円という単位の金額を落としていきます。タンチョウが、北海道のツーリズムに大きな経済効果をもたらしているということが示されています(図-20)。

これは韓国の非武装地帯の状況です。ここへ鳥を見に行くためには、軍部から特別な許可を得ないといけません。ここでは人工的に餌をやるとい

うことは一切やっていません。このように、隠れ家のような施設のなかから鳥を観察します。鳥たちからは、人間がたくさん集まっているのが見えないように工夫されています(図-21)。鳥を驚かすことなく、かなり近くから写真を撮ることができます。実は、エコツーリズムと言ったとき、鳥たちにとっての1番の脅威は、観光地に来る写真家たちです。カメラマンはできるだけいい写真を撮ろうと、必死になってどんどん近づいて行ったり、突然思いがけないところに現れたりします。すると鳥がびっくりして逃げてしまい、戻って来ないということがよくあります。こうしたことへのコントロールが大きな課題となっています。

タンチョウの次はコウノリのお話です。昔、田んぼなどで農薬を使うことがなかった時代には、たくさんの野鳥がいて、鳥と人間は共存していました(図-22)。しかし、農薬を使い始めた途端に、餌となっていた生きものたちが死んでしまい、コウノリ



図-19



図-21



図-20



図-22

も数を減らして、絶滅してしまいました。古い明治時代の記録でも、コウノトリは日本全国いたるところに住んでいたということが示されています。

豊岡市で人工飼育と野生復帰の取り組みが始まり、それがその後長年にわたって続けられ、大きな成功を収めました。その活動に携わった方々に祝福の言葉を贈りたいと思います。この成功をきっかけに、日本全国いたるところに、コウノトリなどが生息する地域が広がり、昔の日本の美しい風景が戻ることを祈っています。そのために、豊岡市もそうですが、農家と話をして、農業をできるだけ使わない、または極力減らしてもらい、鳥にとっても安全な餌が捕れる、人間も安全安心な有機米が食べられるという、両立に向けた取り組みが行われています。

これは1925年あたりからコウノトリが絶滅に向かってどんどん減少したようすを表わしています(図-23)。こちらは捕獲され、人工飼育されて放鳥さ

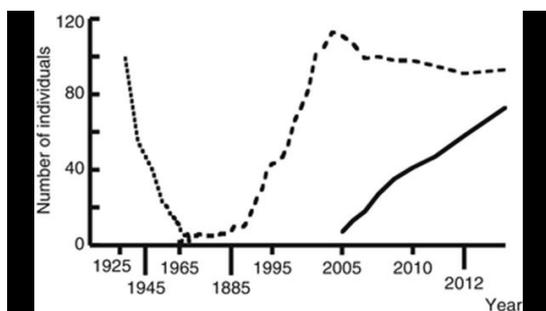


図-23

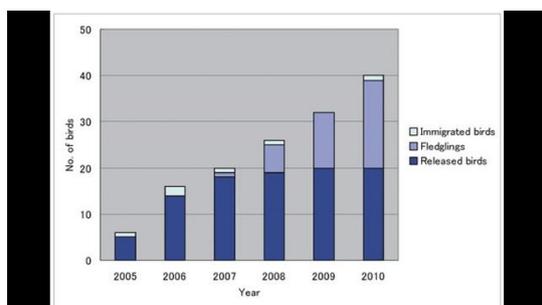


図-24

れ、数が増えていっていることを表す図です(図-24)。放鳥された個体がペアを組み、産んだ卵から孵った雛が野生のまま育った数、つまり、純粋な野生の個体数が灰色っぽい棒線で表わされています。その下側の黒っぽい線が捕獲後人工飼育され、自然のなかに放鳥された数です。白いのは、すでに野生に放たれたものが別の場所で発見された数です。韓国まで飛んでいったものもあります。このコウノトリを見に、何十万という人たちがやって来ます。これによって地元の経済が潤っています。

続いて、トキについてお話しします。私自身もこのトキの問題に関して個人的に関わっています。コウノトリと同じように、日本のトキは一度絶滅し、現在佐渡島で個体数が回復してきています。韓国でも絶滅したとされていましたが、1974年、私は非武装地帯で、4羽のトキがまだ生息しているのを発見しました。そのとき撮影した写真がこれです(図-25)が、4年後の1978年には、これら4羽も消え去ってしまいました。

東京に来たとき、NHKに出演しまして、そのトキを発見した話をしました。あの頃はまだ髪の毛も豊かでした(図-26)。野鳥の会の協力で、韓国で発見したトキの写真のコピーを100枚くらい刷ってもらいまして、韓国の同僚たちのところへ持ってきました。

中国の専門家や仲間たちにも100枚のコピーを配って、中国のどこかにトキが残っているかもしれ



図-25

ないので探してくださいとお願いしました。写真を配られた人たちは、その後いろいろと探してくれました。そしてとうとう1981年、中国東部のかなり人里離れた地域で、7羽のトキが生息しているのが発見されました。この7羽が生き残った大きな理由は、この地域の農家の人たちは非常に貧乏で、お金が無いので農薬を買って撒くということさえできなかったことです。そのおかげで田んぼには豊かな餌があったので、トキたちは生き残ったと思われます。この中国のトキたちは非常におとなしく、人間もあまり怖がることもなく、農家のすぐ近くの木の上に巣を作るという習性がありました。

ほとんどの餌は、あまり農薬の使われていないきれいな湿地のような田んぼで捕っていました。私の考えでは、こういうきれいな生息地や湿地があれば餌の確保が可能ということです。また、人家に近い場所で巣を作れば、人間が近くにいることにより、この鳥を襲う捕食動物が近づかないということで、

うまく生き残れたのだと思います(図-27)。飼育下でのトキの繁殖は、それほど難しくはありませんでした。巨大なトキ用の柵をつくり、群れを一緒に入れておくと、自分たちで繁殖相手を選びます(図-28)。現在中国の数か所で、全部で約1,000羽のトキが人工飼育され、約1,000羽が放鳥されて野生化しています。

この結果、中国より贈り物として、日本と韓国にトキが贈られました(図-29)。佐渡島では人工飼育が成功して、その後島内の自然環境に放たれました。韓国でも成功して、今年あたりから放鳥するという計画があります。このように、美しく希少な鳥の個体数がうまく拡大して、野生復帰が成功するようになれば、自然を守り、復元するという点での成果だけでなく、各地でエコツーリズムが発達し、地元の経済の発展に役立つという成果も生むことになります。

タンチョウ、コウノトリ、トキの3つの例をご紹介します



図-26



図-28



図-27



図-29

ました。しかし、こうした美しく、有名かつ目立つ鳥がいない場所は日本全国にあります。だからと言ってがっかりしたり、ダメだと思ったりする必要は全くありません。と言うのは、日本には、野鳥に限らず、世界的にも非常に珍しい野生動物が、各地にたくさん隠れているからです。例えば、趣旨説明で池谷会長が、韓国の例を見せられていました。鳥などの復元に役立つヨシ原の環境を使って、非常に大きなお祭りを行っている例などもありました。

アメリカの例で言えば、南部にあるルイジアナ州。ここは湿地が多い所で、州内の町の人たちは、そこにいる地元の動物を使ったり、他のテーマを作ったりしてしょっちゅうお祭りをしています。アメリカだけでなく、世界中にも有名なお祭りがいろいろとあります。

私は数日前に、ウィスコンシン州から多くのエコツアーリストを連れて、まず中国と韓国でツルを見て、最後に釧路の方へ皆さんをご案内してタンチョウ

を見ました。結構お金のある富裕層の人たちが、エコツーリズムを楽しんでいます(図-30)。皆、ツルの観察や撮影に興じていました(図-31)。私は、こうしたエコツーリズムを楽しんでもらうため、これからも引き続きアメリカから人を連れてくるつもりです。日本のエコツーリズムは需要があるため、世界中からそういう人たちを連れてくる人は他にもたくさんいます。海外の人にエコツーリズムを楽しんでもらうため、体制を整えたり、積極的にプロモーションをしたりといった日本側の今後の努力にも期待をしています。最後に、日本には潜在的な自然資源がたくさんあるということを強調したいと思います。

また、先のツアーで北海道に行ったとき、日本サイドのホストとして、専門ガイドをしてくれた百瀬夫妻に、この場をお借りして感謝の気持ちを伝えたいと思います。北海道のNPO法人タンチョウ保護研究グループの責任者でもある彼らが、熱心に我々のグループをいろいろなところに連れて行ってくれました。お礼を申し上げると同時に、こうしたツアーが行なわれているということを皆様にお知らせして、私の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

明日、私はウィスコンシンに向けて帰りますが、また、日本に来ます。



図-30



図-31



使用図版は全て国際ツル財団より提供

## サステイナブル・ツーリズム ドイツと日本から印象を語る

駐日ドイツ連邦共和国 大使  
ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン氏

温かいご紹介のお言葉をいただき、ありがとうございます。池谷会長ならびにご列席の皆様、本日はお招きいただき、まことにありがとうございます。この度は、ドイツにおけるエコツーリズムについてお話する機会をいただき大変嬉しく思います。このことが少しでもドイツの宣伝になればと思っております。

エコツーリズムは、ドイツにおいて、現在大きく成長をしている分野のひとつです。毎年、より多くの人々が手つかずの自然が楽しめる地域を選んで、そこで休暇を過ごすようになってきました。外国からの訪問客の多くも、それをねらってドイツを訪れています。「なぜドイツを訪問地に選んだのか」という質問に対して、ドイツを訪れる観光客の約3分の1が、「ドイツの自然を楽しむため」と答えています。また、「せっかくの休暇なので、できるだけエコや資源に配慮して、環境に害を与えないかたちで過ごしたい」と答える人も多くいます。もうひとつの条件として、「観光業界で働く方々の労働条件も、社会が容認できるかたちであってほしい」、ということも挙げる方々もいます。

今日の私の講演では、ドイツにおけるエコツーリズムについて、いくつかの例を使ってお話したいと思います。トピックを3つ挙げてみました(図-1)。ドイツの自然保護地域で楽しむ自然の風景、バードウォッチング。そしてもうひとつ、ドイツの特徴として挙げたいのが、旧東西ドイツの国境地帯にある、

今はグリーンベルトと言われている場所です。かつてそこはデスゾーン、無人地帯で、ヨーロッパあるいは世界で最も厳重な警備が行なわれていた国境地帯の跡地があります。当時は無人地帯でしたので誰も入れませんでした。もちろん国境を越えることもできませんでした。その結果、今では、自然豊かなグリーンベルトとなっており、他に類を見ない多様な動物や植物の種類が残るビオトープとなっています。

この場をお借りして、ドイツのエコツーリズムの広報という点で、非常に大きな役割を果たしているドイツ観光局をご紹介します。本日は、ドイツ観光局日本代表の西山さんが会場に来られています。西山さんはドイツ観光の専門家ですので、質問のある方は後ほど直接聞いていただければと思います。

さて、ドイツ観光局は、ドイツの自然保護地区を



図-1

保護するために、いくつかの戦略を練っています。その戦略には、一方で持続可能なかたちの観光を推進すると同時に、他方では、その地域、地元をの経済をもっと発展させる、経済力を高めるということがねらいとしてあります。

第1のテーマは、ドイツにおける自然保護地域です。ドイツには全部で130の自然保護区があります。この地図の黄色で示されたところが自然保護区です(図-2)。これらの自然保護地域は、面積としてはドイツ国土の35%を占めています。全部で16の国立公園と104の自然公園、それに15のユネスコが指定する生物圏保護地区があります。

この自然保護地域は、いろいろな役割を果たしています。そのひとつは、生態学的な多様性を保つことです。手つかずの自然をありのままの姿で、将来的にも保護していくという点で、自然保護地域は重要な役割を果たしています。もうひとつの大事な役割は、そこを訪れる観光客に対する環境教育を推進するという点です。つまり、そこに行ったらどのような自然が見られるか、それについて学ぶというのも自然保護地域の役割の大きなポイントとなります。さらには、こういったエコツーリズムを通じて地元の経済を後押しする、例えば、レストランなどにおいて、地元の産物を使った料理を提供することで、地元の経済を活性化するという効果もあります。

このように、ドイツにおけるエコツーリズムには、

主に2つのねらいがあるわけです。ひとつは、もちろんその地域の自然を保護するということですが、それと同時にそれぞれの地域、地元の経済的な利益を迫及するという点もあります。それらをうまく組み合わせることで、経済的な発展と自然保護の両立が可能になります。そのことが、ドイツのエコツーリズムが大きな成功を収めている重要な要素のひとつではないかと思えます。

ここで、ドイツにある130の自然保護地域のなかから、いくつか例を挙げたいと思います。ひとつは、ドイツの最も北に位置するシュレスビヒ・ホルシュタイン州のアーチェ・ヴァーダー動物公園です。アーチェは方舟という意味で、ノアの方舟の方舟です(図-3)。ここは、野生動物ではなく、絶滅の危機にある家畜用の動物種を保護するための場所です。つまり、古来種のブタやヒツジ、ヤギなど、昔からある種を保存するための自然公園です。

この自然保護地域は、生きた資料館と言えるかもしれません。一方で、家畜の歴史についていろいろと学ぶことができ、他方では、人間と動物が直接ふれあう機会を提供しています。家畜が人間の長い文化的発展のなかで、どのような役割を果たしてきたかについて学ぶことができます。実際にこれらの動物にふれることができますので、とくに子どもたちにとって、非常に刺激のあるいい体験になります。

もうひとつの例は、東部ドイツのチューリンゲン



図-2



図-3

州にあるハイニヒ国立公園です(図-4)。ここにはドイツで最も規模の大きな、商業目的ではない落葉樹林が存在しています。2011年に、ユネスコの世界自然遺産として認められ、2年前の2017年には、345,000人の来園者がありました。ドイツやヨーロッパ全体で見ても人気のある自然公園です。ハイニヒ国立公園のひとつの特徴は、環境教育を非常に大切にしていることで、併設されている環境教育用の施設で、多様な教育・講座を受けることができます。とくに、自然公園や国立公園には、完全に手つかずの自然がそのままに残っていますので、他では見られない動物もしくは植物の種類も見事にそろっています。ハイニヒ国立公園のひとつのアトラクションとして、「樹冠の小道」というのがあります。ここを歩くと、木の上から鳥のように森が見られるというものです。

この国立公園は、先ほど申しましたかつての東西ドイツにまたがる国境線のグリーンベルトだったところにあります。ドイツの東西分断時代には厳重な警備が行なわれていた国境でしたので、全く人が入らない地域でした。その結果、自然がのびのびと回復しました(図-5)。

グリーンベルトに見られるような風景は、観光客に非常に人気のあるスポットとなっています。様々なアウトドアの活動も楽しめます。ハイキングやカヌー、乗馬、サイクリングなど、アクティビティの種類もいろいろあります。そういったところにある宿やレス

トランでは、もちろん地元の野菜や産物のみを使った郷土料理を出しています。それは地元の経済を活性化する非常に大きな要素のひとつです。日本でも同じようなコンセプトがあって、私も日本を旅するときには、よく地元の産物が中心の郷土料理を楽しんでいます。

かつての東西ドイツにまたがる国境線の話に戻りますと、現在グリーンベルトとなっている場所が当時無人地帯だったということを忘れないために、今も監視塔が残されています。ここでは昔、国境を越えようとした多くの人々が、命を落としました。

3つ目のテーマは、先ほども申し上げましたバードウォッチングです。昨今バードウォッチングはますます人気を呼んでいます(図-6)。その理由は、都市化が進むなか、都市に住む人たちが気晴らしとして、野外に活動を求めているからではないかと思えます。ドイツは、北に北海、南にはアルプスがあり、景色が全く異なる地域がありますので、動物や植



図-5



図-4



図-6

物の種類が非常に豊富です。ドイツにもともと生息している野鳥に関してだけでなく、渡り鳥についても実に多くの種がいます。渡り鳥は、春になると繁殖期で南の国からドイツへとやってきて、また秋になると北欧からドイツへと渡ってきてそこで越冬します。

バードウォッチングと言うと、たくさんの野鳥がよく見える地域のひとつに、北ドイツのヴァーターメアがあります。ワッデン海とも呼ばれ、干潟という意味です。ここでは、ハンブルクのまちを通過したエルベ川が北海に流れ込み、日に2回の干満が毎日繰り返されています。満潮の時には、真っ平らな海岸線に水が張って、干潮時には、その名のとおり完全な砂地の干潟になります。数多くの絶滅の危機にある野鳥の繁殖地であり、ドイツで越冬する野鳥の絶好の生息地となっています。その北海とワッデン海はハンブルクというドイツで2番目に大きい都市に近いので、ハンブルクのような大都市の人もバードウォッチングを楽しむことができます。

これでドイツにおけるエコツーリズムについての発表は終わりになります。皆様にとって少しでもご興味のある話であつたら嬉しく思います。もしかすると、これでドイツを訪れたいというお気持ちになられたかもしれませんね。とくにこうしたエコツーリズムに関しては、それに伴った地域の活性化など、ドイツと日本が互いに学び合うことがたくさんあると思います。両国とも都市化がますます進み、田舎

離れが起きていることから、地域を活性化し、それと同時にせつかく残っている野生動物・野鳥・自然の保護に努めることが、今日の大きなテーマだと思えます。

さて、今日のテーマは観光ですので、最後に私の日本での旅について少しお話したいと思います。私は日本の47都道府県を、全て少なくとも1度は訪れたことがあります。そこで、その時の印象を、5枚の写真で簡単にご紹介したいと思います。日本を旅するなかで本当に素晴らしいところをたくさん見ましたので、それを皆さんと共有したいと思います。

まずは、北海道にある旭岳の風景です(図-7)。火山があつて、緑の地帯もありました。そこで妻とハイキングを楽しみました。とくに印象深かったのは、長いハイキングの後、疲れた体を夜に温泉の湯船に浸かって温めるという日本独特の楽しみ方でした。これはドイツでは絶対にできないことなので、日本のエコツーリズムを考えた時、旭岳はひとつ素晴らしい訪問先となると思います。

2つ目は、倉敷の美観地区です(図-8)。ここを訪れたのは、去年発生した水害の前ですが、とくに印象深かったのが、人々が古い文化を大事に丁寧に守っておられるということでした。

3つ目は、自然というのはただ美しいだけではなく、恐ろしい破壊力も持っているということを物語る写真です(図-9)。この場所がどこだったかはつき



図-7



図-8

りとは覚えていませんが、東北地方のどこかで大震災の3年後の2014年に訪れました。この写真をなぜ撮ったかと言うと、ホテルの建物の1階と2階は完全に津波に飲み込まれてなくなっていたからです。上の階はそのままでしたが、自然の恐ろしさをつぶさに物語っているという感じがします。

4枚目の写真は、日本の景色のなかで、私にとって最も印象深いもののひとつです。鹿児島県の屋久島です(図-10)。岩であろうが木であろうが、全て深い苔で覆われていますので、まるでおとぎ話のような、神話のなかの景色のような気がしました。こうして実物を見ると、宮崎駿監督があそこをモデルに「もののけ姫」を作ったというのがよく分かります。

次は、宮城県にある松島です。松島と言えば、とくに月見で有名ですが、昼間でも、雲や海の劇的な変化があります(図-11)。

最後のスライドですが、これは数年前から毎年

ドイツ大使館で行っている絵画コンテスト「私のドイツ」の作品のひとつです。日本全国の小・中学校を対象に、自分はドイツをどう見ているか、どういうイメージが浮かぶかを描いてもらうコンテストです。この絵は前回のコンテストの応募作品の絵のひとつです。

ご清聴ありがとうございました。



図-9



図-11



図-10



使用図版は全てドイツ大使館より提供



## 地域と自然とともに取り組む観光振興

全日本空輸株式会社マーケティング室  
観光アクション部長 藤崎良一氏

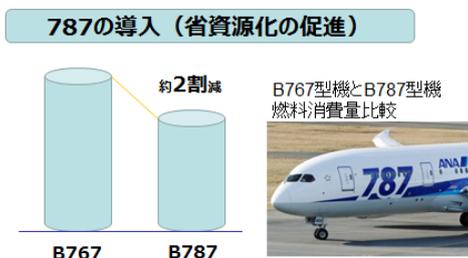
全日本空輸株式会社の藤崎良一でございます。本日は、お招きいただきまして誠にありがとうございます。この素晴らしいフォーラムにおいて、皆様の前で発表の機会をいただきましたことに感謝申し上げます。それではANAグループの観光振興における取り組みを紹介させていただきます。

私たちは、「ANA」という青い翼の飛行機を運航している航空会社です。1952年に2機のヘリコプターで輸送事業を開始し、本年で創業66年目を迎えました。これもひとえに、皆様が航空輸送に対してご理解くださり、ご利用をいただいた賜物と感じております。この場をお借りして感謝申し上げます。ANAグループは航空輸送を中心に事業を展開しておりますが、事業活動に対する社会的責任、いわゆるCSRの観点で、幅広い分野に関して

取り組みを行っています。昨今は、主に「環境」「人権」「ダイバーシティ&インクルージョン」「地域創生」を中心に、CSR活動を推進しています。まず、「環境」に関する取り組みをご紹介します。

環境については、1998年に「環境に関する基本的な考え方」を整理し、2012～2020中長期環境計画「ANA FLY ECO 2020」に基づいて、環境負荷の低減に取り組んでいます(図-1)。航空機については、より燃費のよい航空機の導入を進めております。ボーイング787という航空機は、機体重量も軽く、燃費のよい航空機と言われております。1982年に航空会社が利用を開始したボーイング767という航空機と比較すると、2割以上燃費がよい、すなわちCO2削減量も少ない、と言われております。ANAは、他の航空会社に先駆けて、ロ

### ANAグループの「環境」への取り組みANA



2011年9月に初号機を受領、2018年3月時点で64機を保有

図-1

### ANAグループの「環境」への取り組みANA



図-2

ーンチカスタマーとして、2011年9月に787型機を受領して以来、古い航空機を退役させ、現在では64機の787型機を保有しております。

航空機の運航や整備においても、環境負荷の低減に努めています。飛行機の翼の先に垂直についている小さな翼を見たことはありませんか？これは、ウイングレットというもので、風の抵抗を小さくし、燃費の向上を図るためのものです(図-2)。

一方で、自然環境保全という観点から、ANAグループでは、2004年にサンゴ再生プロジェクト「チーム美らサンゴ」を立ち上げ、沖縄本島恩納村海域でサンゴを植え、サンゴ礁生態系の再生に向けて取り組んでいます(図-3)。これまでのべ3,200名を超える方々に参加をいただき、8,900本を超えるサンゴの植え付けを行ってきました。この取り組みはANAグループ内でスタートしたのですが、現在、19の企業の協賛と、環境省、沖縄県、恩納村からの後援をいただいて活動しています(図-4)。そして、2017年には、「国連生物多様性の10年日本委員会」が主催する「生物多様性アクション大賞 2017」に入賞しました。

さて、ここまで環境への取り組みについてお話してまいりましたが、ANAグループは、環境以外にも、人権、ダイバーシティ、地域創生を重要課題と位置づけ企業活動を行っています。ここからは、地

域創生の取り組みについてご紹介いたします。政府が観光立国を宣言し、2020年にむけた様々な取り組みが行われるなかで、ANAグループも地域創生に力を入れています。私たちが目指す方向性は、図に示したようなループを回していくことです(図-5)。「観光振興を通じた交流人口の拡大による地域活性化を図り、航空機を多くの方に利用していただくことで、企業としても利益をあげながら、得た利益でネットワーク維持や拡充を図り、経済的価値と社会的価値を創出していく」というループを回していきたいと考えています。

どこの企業もそうですけど、日本の人口が減っていくというなかで、国内線の航空需要も心配せざるを得ません。国内線航空需要を下支えしてい

### ANAグループの「環境」への取り組みANA

#### サンゴ再生プロジェクト(環境保全活動)

##### ■ 協賛企業



図-4

### ANAグループの「環境」への取り組みANA

#### サンゴ再生プロジェクト(環境保全活動)



2004年から、のべ3200名を超える参加者により8900本を超えるサンゴを植え付け。

図-3

### ANAグループの「地域創生」ANA

##### ■ 目指す方向性



図-5

くために、やはり観光振興により地域が元気になって、交流人口や関係人口が増えていくことが、航空会社にとっても必要だと考えます。

こうした地域創生の動きは、従前よりグループ各社でありましたが、各社でやっていた事業をまとめ、相乗効果を発揮して、グループとしての最大限の効果を生むことができるように、観光アクション部を2017年10月に設立しました。そして、国内にある32の支店を「エリアの窓口」として推進体制を整えました(図-6)。私たちの強みのひとつは国内ならびに海外に支店があることで、そこには当然、支店長やマネージャーやいわゆる会社の組織がございます。そこでいろんなセールス活動を行っております。支店にご相談をいただければ、何かしらのソリューションをご提供できるかもしれません。

ここからは、「地域創生」の取り組みの事例をいくつか紹介します。ANAグループ内でシンクタンク機能を有するANA総合研究所と、旅行部門を担うANAセールスが、欧米豪からの訪日誘客プログラムとして「ODYSSEY JAPAN」を展開しています。自治体と協力をしながら、地域への誘客を図るものですが、2018年度においては、山形、鳥取、佐賀、宮崎にて展開しました。そのなかで、佐賀県の事例を紹介します(図-7)。

私たちは、訪日外国人の方々に「何を見てもら

いたいか」という視点で、佐賀の「日本らしい見どころ」を詰め込んだツアーを企画しました。実際、欧米のお客様に参加をしてもらった反応を見ると、観光地や日本的な風景よりも興味をもったのは、佐賀の有明海にいる「ムツゴロウ」でした。ムツゴロウの観察は、当初行程に入っておりませんでした。初日の佐賀牛のランチ会場に「ムツゴロウ」の写真が飾ってあったのです。参加された方々は、目の前に出される佐賀牛以上に、ムツゴロウに興味を抱かれ、様々な質問が出ました。お客様の関心が非常に高かったので、ツアーの行程を一部変更して、急きょ干潟行きを追加したところ、興味深く写真を撮って、大喜びされていました(図-8)。

佐賀の干潟といえば、国際的に重要な湿地とし



図-7

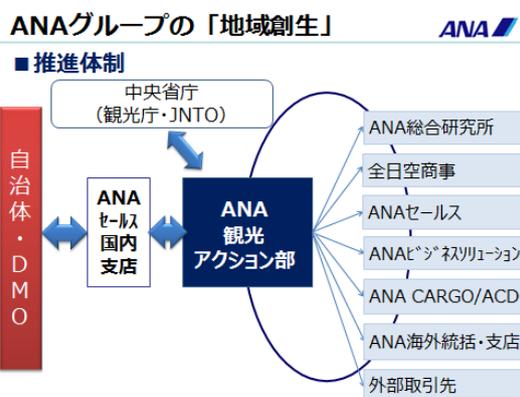


図-6



図-8

でラムサール条約湿地に登録された干潟もあり、飛来する野鳥観察に適した場所です。欧州の旅行会社に対して佐賀というエリアのセールスをしたときに、一番に聞かれたのは、その歴史や観光地に関するのではなく、「干潟に飛来する野鳥リストはあるか」ということでした(図-9)。

また先日はこんな話がありました。ドイツの団体を四国に連れて来て用意したバスに乗せ、その車内で次に訪れる場所の紹介をDVDで見せたところ、「その映像を見せたいなら事前に言ってくれ、事前に言ってくれていればチェックをしていた。今は車窓からの景色を楽しみたい」と言われたということで、日本人の感覚とは大いに違うものだと思ったものです。

こうした事例のように、観光振興を進める際に、我々が見せたいものを見せようとしがちですが、訪問者が見たいと思うものを見せることが重要です。「究極のマーケティングはセリングを不要にする」というのは、マーケティングの第一人者であるピータードラッカーの言葉ですが、何が求められているのかを徹底的に突き詰めれば、売ることには苦勞しないということだと思います。

では、「訪問者が見たいものは何か？」を考えるときには、その地域の特徴的な、奇をてらったものを探そうとしがちですが、訪問者が求めているの

は、そこに住む人が見慣れた光景であり、食べ慣れたものであり、観光資源とは感じないものだったりすることも、数多くあるということを忘れてはいけないということでございます(図-10)。

例えば、宮城県石巻市の「田代島」。昔から地元の人は猫を大切にしており、島民よりも猫の数が多いと言われている島です。島民にとっては、多くの猫がいるのは日常の光景ですが、観光客が訪問して、その猫の多さに驚き、「猫島」としてSNSで拡散することで、猫好きが集まる島になりました。また、北海道で見られる「ジュエリーアイス」。十勝川の氷が太平洋に流れ出し、河口の海岸に打ち上げられる氷の塊が、太陽の光を受け美しく輝く自然現象です。地元の人にとって見れば、冬の海辺の日常の光景ですが、SNS等で拡散され、多くの観光客がジュエリーアイス見たさに、冬の道東の街を訪れるようになりました。

こうした例のように、観光振興という視点によって、地元では気づかぬものに価値が見いだされ、保護しようという動きにつながっていく事例があります。観光振興と自然保護は反するものとする見方もあります。観光客を呼ぶにはインフラ整備が必要という発想のもと、大規模な施設の建設によって自然が壊されてしまうという事例があったからでしょう。しかし、最近では観光振興が地元を見



図-9

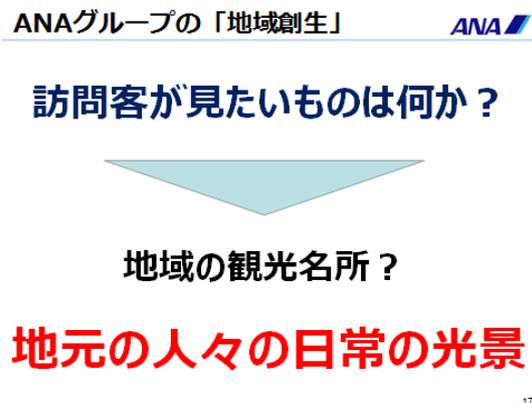


図-10

直すきっかけとなり、それまで意識もしなかった自然や文化を改めて守ろうという、保全の動きが見えはじめてきているのではと感じます(図-11)。

ANAグループでの事例をもうひとつ紹介します。ANA総合研究所がぐるなびと連携して立ち上げた「ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構」という組織があります。ここが中心となり、温泉地を「めぐって」「たべて」「つかって」、じっくりとその土地の魅力を感じていただくことをねらいとしたウォーキング大会を開催しています(図-12)。2017年度から全国各地の温泉地で開催しており、これまでにのべ6,000人以上に参加いただきました。別府での2017年11月のウォークを紹介します。全長7キロメートルのコースに、別府の美味しい名産品を食べることができる10か所の立ち寄りスポットを設置し、さらに、明礬温泉湯の花小屋や海地獄という観光名所もコースに組み込みました。実施にあたっては、立命館アジア太平洋大学、別府大学、別府翔青高校などの学生の方々にボランティアスタッフとして力を貸していただきました。

このウォーキングでアンケートをとった際、評価されたのは「地元の人とのふれあい」でした。自然の中を歩くときに、「自然をよく知る人」「地元でその自然と向き合って生活している人」「自然を守ろうと活動している人」など、様々な人から説明を聞

き、様々な人の思いを知ることで、「自然を見る」という視覚だけではなく「ストーリー」として「自然を感じる」ことができるから、評価が高いのだろうと推測しています(図-13)。そして、ストーリーとして感じた自然はSNSや旅行口コミサイトなどを通じて発信され、それを見た人が自然の素晴らしさや自然を大切にしないでとはという意識を抱くことにつながっていくと感じています。2018年度は25か所でこのイベントを実施することができました。おそらく来年度は30か所になるのではないかと考えています。

「自然」と「人」という観点でANAグループの取り組みから感じることをご紹介してきましたが、最後に、国際的な観光振興に関わる取り組みについても、少しだけご紹介したいと思います。ご存じの

ANAグループの「地域創生」 ANA

観光振興と自然保護は反するもの？

観光振興により  
 地元の自然の価値の見直し  
 自然保全の動き

図-11

ANAグループの「地域創生」 ANA

ONSENガストロノミーウォーク



2017年から実施、のべ6,000人以上が参加

図-12

ANAグループの「地域創生」 ANA

ONSENガストロノミーウォーク



図-13

とおり、2015年9月に、ニューヨークの国連本部において、「国連持続可能な開発サミット」が開催され、150を超える加盟国首脳に参加のもと、「持続可能な開発目標」が採択されました。目標は17項目に及んでいますが、観光分野で期待される項目は、「雇用による経済成長」「責任ある消費と産」「水産資源の維持」となっています(図-14)。

観光振興に関わる国際機関に、国連世界観光機関があります。UNWTOとも呼ばれ、1970年秋に採択されたUNWTO憲章に基づき設立されました。スペインのマドリッドに本部を置き、加盟157か国、加盟地域6地域、500以上の賛助会員で活動を行っています。ANAも賛助会員として参加させていただいています。

UNWTOでは、「観光は世界の平和に寄与する」と提唱しています。観光振興による地域創生は、「雇用の創出」や「交流人口の拡大」を促し、「地域経済の活性化」に寄与します。地域経済の活性化は、地域間の格差の是正を図り、定住人口の拡大を促進することにつながります(図-15)。一方で、多くの旅行者が各地を訪れ、人々や文化に触れることで、多様性の理解の促進が図られると同時に、観光資源の保護の観点も含めて、自然環境の保護や文化財の保全という動きにつながっていきます。こうした一連の動きは、貧困問題の解

決や世界平和という非常に大きい動きに寄与するということです。

ANAグループは航空輸送という事業を行いながらも、本日紹介してきたような観光振興の取り組みを微力ながら進めております。押し付けやひとりよがりになることなく、足元をしっかりと見据えながら、その地域に住む人々と、その地域の自然とともに、観光振興を図ってまいりたいと考えております。引き続き、皆様のご理解、ご支援を賜れたら光栄です(図-16)。

これにて、私からのANAグループの取り組みのご紹介を終了させていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

国際的な観光振興に関わる取り組み ANA

観光は世界平和に寄与する



図-15

27

国際的な観光振興に関わる取り組み ANA

観光分野で期待される項目



雇用による経済成長 責任ある消費と生産 水産資源の維持

図-14

25

終わりに ANA

地域の人々と自然とともに取り組む観光振興



図-16

28

使用図版は全て全日本空輸(株)より提供

## アウトドア7つのミッション

株式会社モンベル

代表取締役会長 辰野勇氏

ご紹介いただきました辰野でございます。よろしくお願ひします。先ほど、もののけ姫の話が出ていたので、ちょっと笛を1曲聞いていただこうかと思ひます。

どうも失礼しました。これは最近僕が凝ってしまひて、水道管で作ったものです。会社の会長室で穴を開けて作って、そのうちモンベルで売れだすつもりでございます。よろしくお願ひいたします。今日は20分の時間をいただきまして、短い時間なのですけれど、頑張ってお話します。

ご紹介いただきましたように、私は株式会社モンベルというアウトドア用品の製造販売をやっております、小さい時から山が好きで山登りをしています。ご紹介いただきましたように、ヨーロッパアルプスの最も難しいとされているアイガー北壁を、日本人としてはじめて、生きて2人で登りました。その後、マッターホルン北壁の世界最年少記録というのものもっています。今からちょうど50年前の話で、今年71という歳になりました。この間アウトドア用品を販売させていただき事業をやってきたのですが、ずっと43年間やってきたなかで、最近つとに感じるのは、アウトドアは21世紀を救うひとつのキーワードになるのではないかと考えています。

おこがましいのですけれども、アウトドア7つのミッションというのをちょっとご紹介したいと思ひます。ひとつ目に、自然環境への意識の向上。2つ目に、野外活動を通じて生きる力を育む。とくに子どもた

ちの生きる力。僕自身がそうだったように、野で遊ぶことで得られる知恵とか勇気とか、そういったものを身に付けてもらうひとつの手段になるのではないかと。

3つ目に健康寿命の増進。ピンピンコロリ。本当に最後のその日まで元気で生活するにも、アウトドアではおいしい空気を吸って、身体を使って、楽しいことをやるってことが役立つ。

4つ目は、自然災害時の対応力。アウトドアは、有事の際に本当に役立ちます。いわゆるライフラインが遮断されたとき、3日間、5日間、1週間と何とか生き抜こうというとき、実はアウトドアにはすごく力がある。

5つ目は、エコツーリズムにおける地域経済活性化。先程来、いろいろ話がありました。全日空の方からお話のありましたエコツーリズムの例ですが、東京、大阪のような大都会から出て地域に行けば本当に素晴らしい自然がたくさんあります。こういったところを活かして地域の経済を活性化させる。

6つ目に、農林水産業、一次産業の活性化ということを挙げています。アウトドアウェアはそのまま使える。とくに女性にお洒落で快適な農業ライフを楽しんでもらいたいと思ひています。そして最後の7つ目が、バリアフリーということになります。自然環境には、実は都会のバリアフリーの比ではないくらい、障害をもった方々や高齢者にとって自由に動きまわられる空間がある。

上からもう一度行きますと、自然環境は環境省ですよね。2つ目の野外教育は文科省です。3つ目、厚労省。4番目は、厚労省と国交省。5つ目はエコツーリズム。環境省もありますし、国交省、観光庁という話になると思います。6つ目は農水省。バリアフリーについては厚労省というふうになる。すなわち、縦割り行政の問題を予告して、ズバッと突き抜けて対応できるのではないかと勝手に自負をしております、いろいろな取り組みをしてきました。

7つのミッションをひとつのテーマとして、実はこの間、いろいろな自治体との包括連携協定を結んでまいりました。この4~5年の間に、47の産官学、三重県、長野県、鳥取県、熊本県、山形県、高知県、その他市町村単位で40。そして今日は全日空のお話がありましたけれども、日本航空との包括連携を結んでいます。大学は天理大学。近々、京都大学との包括連携を結ぶ予定となっております。こういったかたちで各地域の知事さんと包括連携を結ばせていただきました。

ここからは、7つのミッションについて、もう少し掘り下げてお話させていただきたいと思います。まず自然環境について。WWF、日本自然保護協会、ボルネオ保全トラストジャパン、環境省、こういった組織へのお手伝いをさせていただいています。他には例えば、尾瀬保全財団、日本ウミガメ協議会などがあります。石原大臣のときには、環境省のレンジャーのユニフォームを我々の方で提供させてもらうこともありました。山本大臣の折には、国立公園のオフィシャルパートナーという締結もさせていただきました。

モンベルの事業活動のなかに、地域との対応をさせていただく事業、モンベルフレンドマーケットというのがあります。そしてフレンドフェアというのがあります。毎回、横浜、大阪、名古屋とか、地方都市を巡回するわけですが、2日間で15,000人規模のモンベルクラブ会員の皆様がお越しになる場とな

っています。これは環境省が進めている宮城県みちのく潮風トレイルのプレゼンテーションの場を提供させていただいております。ただ、本日はエコツーリズムに特化して話をさせていただくということで、この辺のところははしよらせていただきます。

子どもたちの生きる力、川の学校、吉野川の河口堰、第十堰に対して江戸時代から造られてきたものを守りたいという活動の一環として、子どもたちにもっと川に出てきてもらおうと、私も少しお手伝いさせていただいております。子どもたちは、本当に元気に一日川遊びをしています。夜は私の下手な笛を聞かさせるわけです。夜話をする、眠い目をこすりながら、それでも一生懸命に、僕のアイガー北壁を登ったときの話とか、子どもの頃の話をする目と目を輝かせて聞いてくれます。

健康寿命の増進。私どもが本社を置いている大阪に1,125メートルの金剛山という山があります。この行政区にあります千早赤阪村の村長が、毎日登山に来るおじいちゃんがいるので、「今日も元気に登っているね」と言ったら、その3日後にお葬式があったそうです。笑うに笑えないですが、山登りを毎日やることによって大往生することができる。僕も山歩きのガイドになってそのお手伝いをさせてもらっています。

災害時の対応力。1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災。僕は大阪にいて、とんでもない揺れを感じて、当日現地に入りました。とてもじゃないけれど今まで経験したことない大参事で、地獄絵がそこに繰り広げられていた。そこでとっさに考えたのですが、寝袋を使って亡くなった方に入っていたらどう思ったわけです。灘校とかの体育館に並べられたご遺体を寝袋に収まっていた。ベトナム戦争のときに、戦死した米兵がベトナムから沖縄に送ってこられるときに寝袋に入ってくるわけです。そして棺に入れ替えられて本国に送られる。不要になった寝袋をボディバックなんて言い

方をしますが、我々お金のなかった学生はそれを買って山登りに使っていました。それを思い出したのですが、やはり生きている方に使っていただこうと思い、当時即座に2,000個の寝袋と600張のテントを配ってまいりました。これは六甲道南公園という公園なのですが、ここがモンベルテント村になったという状況でした。

これは、モンベルの六甲店なのですが、ここも被災しました。これは「アウトドア義援隊」というのを立ち上げました。我々1社ではとても対応できないということで、アウトドアに関連する様々な方々の支援をいただいて行なった取り組みは、本当に多くの方に喜んでいただきました。

そして、2011年3月11日の東日本大震災。これはさすがに当日には入れなかったのですが、2日後プリウスで行きました。あの車はすごいですね、走行距離がとても長い。満タンで1,000キロメートルは走ります。現地に入ったらガソリンの供給がないことが分かっていたので満タンにして行きました。現地で様々なことをしました。一番怖かったのは福島原発の事故です。仙台にモンベルの店がありますので、そこを拠点にして活動しようと思ったのですが、原発からわずか90キロメートルしか離れていないわけです。支援に入った人間が被災したのでは洒落にならないということで考えたのは、蔵王という山の裏にある山形市、天童市で使われていなかった工場をお借りして、義援活動を行なうということでした。

こういうお嬢ちゃんが、お母さんに手を引かれて朝来るのですね。そして、朝から晩まで、義援物資の仕分けをしてくれます。送られてきた義援物資は仕分けする必要があるからです。この作業に対して、お母さんから「辰野さん、本当にありがとうございます」と言われました。なぜかと言いますと、「私たちは現地に入って、被災地で活動することはできないけれど、女性とか子どもとかでもここならお手伝いできる、その場を与えてくれてありが

とうございました」そういうお礼の言葉を言っていたいただきました。すなわち、支援を必要としている人たちに、お手伝いしたいと思う人たちをつなぎあわせる「ブリッジオーバー」のお手伝いのできたのではないかと考えています。

僕自身も被災地や避難所に、義援物資を持ってまいりました。3か月の間に300トンの義援物資を配って回ることができました。それから、お金にして、3,000万円くらいの金額を皆様に配ることができました。これはあの大川小学校です。ここで72人の児童が亡くなっています。実は僕は奈良に住んでいるのですが、このとき、東大寺の長老をお連れして法要していただきました。後ろ姿で写っていらっしゃるの、子どもたちの遺族の方々です。僕は何が悔しかったかということ、この山になぜ逃げなかったのだろうということです。それから、津波が来るということが分かっている、ハザードマップでここまで水が来るということが分かっているのに、なぜ準備ができていなかったのかということです。

このとき、とっさに考えたのはライフジャケットです。このライフジャケットは、折りたためば座布団になります。そして津波が来たときには被ればすぐに使える。これはわずか3,900円です。これを今我々モンベルが提供して回っているのですが、390万で1,000人の命が救えるわけです。これを、おそらくこれから間違いなく起こるであろう南海、東南海地震の被災地になる可能性のある三重県、高知県、こういった自治体の首長、知事さんに直談判して、「これを用意してください。僕は気が付いたので言います。やるかやらないかはあなた方の責任ですよ」と、ご説明して回りました。

そうしたら、なかには実際に対応してくれるところがありました。例えば、これは静岡県浜松の幼稚園です。そこの防災訓練の様子です。僕はカヤックをやるのですが、実は泳げないのですよ。だから、ライフジャケットがどのくらい重要かということをもっとよく分かっています。アウトドアにもこういった

ことができる例です。これは南阿蘇ですね。ここでも震災の後にテントを張って対応しました。

エコツーリズム、ちょっと簡単にいきますね、「SEA TO SUMMIT(シー トゥー サミット)」です。これは全国12か所でやっています。カヤックで海を越えて、海拔0メートルから登山口まで自転車で上がって、そして自転車を降りて徒歩で頂上を目指すというイベントです。環境イベントなので、スピードを競うマッチョなものではなく、こういう海里山の自然環境のなかでいい汗を流すというものです。前の日には、シンポジウムを行なっています。このときは、椎名誠さん、CWニコルさんとか、畠山重篤さんとかという方々にお話をさせていただいております。これはキャロライン・ケネディさんが参加された大会です。これは佐渡の大会ですが、非常にはまられて2回も参加していただきました。

とはいえ、年に1回のイベントなのでもったいない。これだけの環境があるのだから、365日それをいつでもウェルカムして、おもてなしをしましょうというのが「ジャパンエコトラック」という概念です。今国内に17か所できています。座長に養老孟司さんになっていただき、僕は事務局長、専務理事という立場でやらさせていただいております。この写真には、全日空の方の姿も見えます。アメリカ大使館からも来られているし、畠山さんもいますね。それから鳥井信吾さん、サントリーの会長もおられます。こういったルートをマッピングして、それも日本語だけでなく、英語版も作成して対応しています。

今、モンベルは世界各国に拠点があります。これはスイスの直営店です。これはアメリカのボルダー、ポートランド、デンバーにも店ができました。そして韓国にはなんと100店舗もあります。こういったところを通じて、是非日本の自然を紹介していきたいと思って対応しています。これは先ほどご紹介がありました大雪山東川、鳥取です。これは鳥海山ですね。それと大山と、こういうかたちで取り組んでいます。

農林水産業についてちょっとお話をさせていただきます。農業というのは、やはりきつい、きたないという印象があります。けれども、これをお洒落に快適にやっていただきたいということで、今、農水省のプロジェクトのお手伝いで、「農業女子プロジェクト」というものをやらせていただいております。これはクボタさんと一緒にやっているイベントの1コマです。作られた産品をモンベルクラブの会員の方々に、インターネットを通じて、そしてリアルマーケットをつくって販売しています。

モンベルには今90万人の会員がいます。ここにモンベルクラブの会員の方は、何人くらいいるでしょうか?ちょっと手を挙げてもらえますか?でもまだ半分くらいですね。まだの方は是非ご入会いただきたいと思います。今モンベルは直営で地域の活性を支援しています。これはうちの社員ですが、パン屋さんになっています。まさかこういうことをやらされるとは思わずに、モンベルに入社したのだと思います。

「森林プロジェクト」。これについても少しだけふれたいと思います。チェーンソーでも切れないズボンです。日本にはまだなかったのです。これもアウトドアというテクノロジーのなかで実現することができました。安全で快適に農業ライフや林業を楽しんでもらえる。こういうプロジェクトです。

最後にバリアフリーのお話。障害者カヌーを今から30年前に始めました。向こうがユーコン川です。そして2016年のリオのパラリンピックで、瀬立モニカさんが堂々の8位入賞となりました。今度の2020年にも、彼女は頑張ってくれると思います。その時のユニフォームです。

お話ししたいことは、まだまだ山のようにあるのですが、時間が来ましたので、この辺で私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

# 自然と共存する観光 北海道アウトドアガイドの役割

北海道経済部

観光振興監 本間研一氏

北海道庁で観光振興監をしております本間で  
す。北海道の観光イメージと言いますと、大自然の  
景観、食、温泉などが頭に浮かぶと思いますが、  
私からは現在の北海道観光の概況を含めまして、  
自然との共生という視点から、北海道アウトドアガ  
イドの役割について、皆様にご紹介していきたいと  
思います。

それでは、北海道観光がどのような状況である  
かを客観的に見ていただくため、統計データから  
ご紹介します。観光入込客数のトレンドがこちらに  
なります。棒グラフをご覧くださいますと、一番下  
が道内の観光客の推移、真ん中が道外の観光客、  
一番上が外国人観光客です(図-1)。観光客数  
だけで言いますと、道内の観光客が圧倒的に多く  
なっておりまして、道外観光客及び外国人観光客

の割合は、合計しても全体の15%にしかかっており  
ません。道外観光客に関しては、近年は低迷して  
おりましたが、昨年度、11年ぶりに600万人を超え、  
増加基調にあります。また、外国人観光客につい  
ては、折れ線グラフのとおり、平成29年度は279万  
人となり、平成17年度比で5.4倍と、顕著に増加し  
ています。道では、この外国人観光客について、20  
20年に500万人という誘客目標を掲げ、様々な取  
組を現在実施しているところですので。一部の取組に  
ついては、後ほどご紹介させていただきます。

ここで、昨年9月6日に発生した、北海道で初め  
て最大震度7を観測した北海道胆振東部地震に  
ついて触れます。今回の地震は直下型地震とい  
うこともあり、震源地付近での被害は甚大でしたが、  
地震による直接的な被害がない地域も多かったと  
ころです。ただし、ブラックアウト、全道的な停電に  
ともなう物流の停止や、報道の影響もあり、地震の  
直接的な被害がなかった地域においても、観光入  
込客数の急激な落ち込みがありました。9月の1か  
月間の宿泊のキャンセル数が約115万人泊とい  
うことで、甚大な影響が出ております。

そこで、現在「元気です 北海道」という風評被  
害対策のキャンペーンを実施して、様々なPRや  
旅行代金の割引「ふっこう割」などを柱に、需要喚  
起策を行っております。その結果、おかげさまで宿  
泊客数の速報値ではございますが、12月には地  
域によってばらつきがあるものの、国内、外国人の

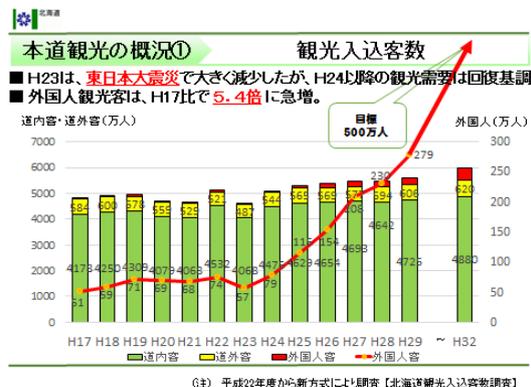


図-1

双方とも地震前の水準に戻ってきたところですが、もちろん、震源地付近の被災地においては、まだ不自由な状況も続いておりますが、その他の大部分の地域においては、観光を楽しめる状況となっておりますので、皆様方におかれましても、北海道を観光することは、本道の主要産業を応援し、被災地支援にもなりますことから、是非積極的に北海道観光においていただければと思っております。

これは外国人来道者数の国・地域別の内訳です。北海道は、とくに台湾の方の人気の高い状況が続いておりますが、近年は中国や韓国からの観光客が急増しているほか、タイやマレーシアといった成長市場からの観光客も増えているところですが。

こちらは観光消費額の資料になります。先ほど、観光入込客数の8割以上は道内の観光客という話をしましたが、観光消費額単価で見ますと、道民一人あたりの消費額が12,000円ほどにすぎないのに対して、道外観光客は73,000円、外国人は178,000円と、道外観光客は道内客に比べて約5.7倍です。外国人観光客に至っては、道内客の約13.8倍の消費額となっております(図-2)。観光入込客数では、15%程度の道外客と外国人観光客となっておりますが、消費額の総額は55.4%と、全体の半分以上を占め、道民の観光消費額を上回っている状況になっています。

先ほど、観光は北海道の主要産業であることを申し上げましたが、実際に観光消費額がどれほどの規模かと言いますと、農業と漁業の生産額に匹敵する規模となっております。農業と漁業を合わせると大体1兆5,000億円くらいで、観光の消費額が1兆4,200億円と、ほぼイコールという状況になっています。農業と言えば酪農や稲作、畑作、それと日本一の生産量を誇るカニや鮭、ホタテ、昆布といった日本の食を彩る海産物、その生産額とほぼ同額が北海道観光のために支出されていることとなります。観光は、北海道経済にとって非常に大きなものということが言えると思います。

なぜ人々は北海道を観光するのか、北海道として競争力のある旅行タイプをこちらにあげてみました。この資料は公益財団法人日本交通公社が調査した旅行者動向調査です。調査項目が整理統合されたことにより、最新の資料がないため、若干古いものとなっております、2013年のものが直近となることをご了承ください。内容として、自然、グルメ、スキー、秘境といったイメージで、北海道が旅行先に選ばれていることが分かります。なお、「世界遺産巡り」の項目がありますが、北海道の世界遺産は、自然遺産の知床であり、隣の「秘境ツアー」という項目も含め「手付かずの大自然」というイメージを持たれている方が多いことが推察されます。道が5年に1度、観光にいらした方々に対して行っているアンケート調査でも同様の質問をしておりますが、北海道を旅行先に選んだ理由として、「自然景観」「食」「温泉」といった順で選んでいる方が多いことが分かります。先ほどの日本交通公社の調査結果とほぼ同じ傾向が見られます。

同じ質問を外国人観光客にしたところ、「自然景観」「食」「温泉」の順位は変わりませんが、自然景観を見るために北海道を選んだ人の割合が、日本人に比べて非常に高いという結果が出ました(図-3)。また、特徴的なのは日本人に比べ、歴史・文化の魅力を挙げた人が多いことです。北海

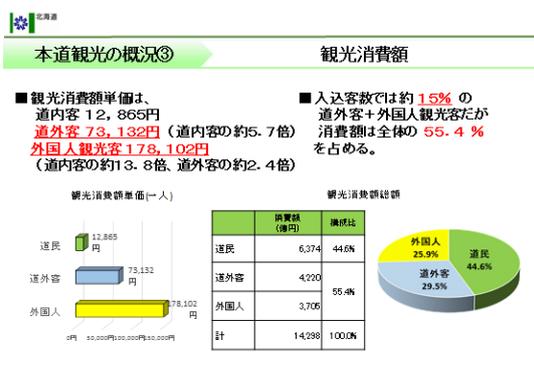


図-2

道で日本文化を感じたいという人のほか、アイヌ民族の文化を見たいという人の割合が日本人に比べて多いのではないかと推測されます。

次に、「さらなる誘客に向けて」いくつかの視点からお話したいと思います。はじめに、外国人観光客の誘致の取組についてです。平成29年度に北海道を訪れた外国人観光客は、279万人となっています。国・地域別に詳しく見ていきますと、一番多かったのは中国の66万6千人で24%、韓国の63万9千人で23%、台湾の61万5千人の22%と続き、北海道における外国人観光客の約9割はアジアからの観光客となっています。アジア地域への偏重は、安定的な北海道観光の振興にとってのリスクとなりますことから、世界の旅行市場において、大きなウエイトを占める欧米からの観光客の誘致が重要な課題となっています。

2つ目は、北海道は、アイヌ民族の伝統文化と共に、この150年の間に東北地方や北陸地方をはじめ、日本各地の文化が織り交ざり発展を遂げた日本でも唯一無二の土地といえます。その歴史の産物が今日まで守られ、発展、改良し、受け継がれており、地名、史跡、芸能、風俗など、多くの面に垣間見ることができます。こうした北海道の特徴的な歴史・文化が、欧米からの観光客に対し、高い訴求力を持つと考えています。

3つ目になりますが、アイヌ文化発信の拠点として「民族共生象徴空間」(通称ウポポイ)が、2020年4月24日に白老町にオープンします(図-4)。白老町ポロト湖畔では、これまで53年間、地域の人々や観光客らに親しまれながらアイヌ民族の文化や歴史を伝えてきた「ポロトコタンアイヌ民族博物館」が、2018年3月末をもって閉館し、新たに開設される民族共生象徴空間の整備が、急ピッチで進められています。この施設は、東京以北では初の国立博物館となる「国立アイヌ民族博物館」や、アイヌ民族の伝統芸能が上演される「体験交流ホール」、様々な体験プログラムが行われる「体験学習館」、昔ながらのアイヌ集落が再現される「伝統的コタン」など、アイヌ民族の文化を複合的に学び、楽しめる施設となる予定です。

4つ目になりますが、北海道と北東北3県の17の遺跡で構成されている縄文遺跡は、「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」として、ユネスコの世界遺産登録を目指した取組が進められています。登録を目指す17遺跡のうち、道内には6遺跡が所在し、約1万年間にわたり自然と共存しながら継続した縄文文化の優れた価値を現代に伝えていきます。世界遺産への登録が実現すれば、欧米を中心としたインバウンドにも大きなセールスポイントとなることが期待されます。

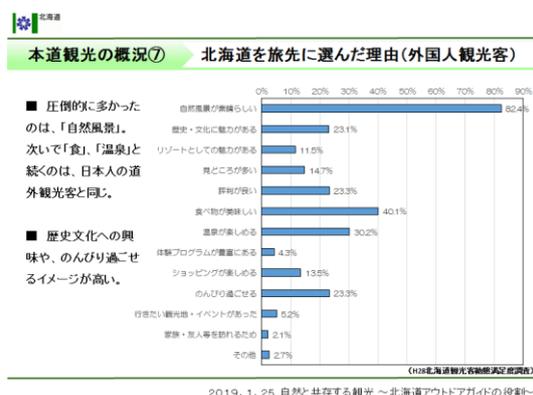


図-3



図-4

5つ目ですが、北海道では自然を活かしたアクティビティが盛んで、流水の上を歩く「流水ウォーク」や、流水の中に飛び込む「流水ダイビング」、巨大なシャチを間近で見る「ホエールウォッチング」など、知床半島をフィールドにするアクティビティが、欧米人に人気のコンテンツとなっています(図-5)。とくに流水ウォークは、近年、流水の上を歩く自分の姿をインスタグラムなどで発信することで大変な人気となっています。陸地の近くでこうした体験ができる場所は世界中でも他に類を見ず、非常にユニークな観光コンテンツのひとつであると言えます。また、東北海道では、シマフクロウ、タンチョウ、オオワシなど、世界でもこの地域でしか見られない多くの野鳥を比較的確実に観察することができることから、近年、欧米の写真家やバードウォッチャーの来訪が急増しています。

最後の6つ目ですが、欧米からのさらなる誘客のために、北海道が優位性をもつ観光資源を改めて見直すと、キーワードとなってくるのが「アドベンチャートラベル」です。アドベンチャートラベルを推進する最大の国際機関である Adventure Travel Trade Association(ATTA)によれば、アドベンチャートラベルとは「アクティビティ」「自然」「異文化体験」の3要素のうち、2つ以上で構成される旅行形態と定義されています。アドベンチャートラベ

ルは、欧米圏で発達したツーリズムのひとつであり、欧米を中心として49兆円とも言われる巨大なマーケットが形成されています。このアドベンチャートラベルを楽しむ旅行者の消費額は、通常の旅行者の1.7~2.5倍とされています。先ほど観光消費額のところでもご説明いたしましたが、観光客の人数とともに観光客の消費単価も大切であり、観光関連産業の振興の観点からも、非常に期待される旅行形態となっています。

北海道には、自然はもちろんのこと、それを活かしたアクティビティ、また、アイヌや縄文といった文化も観光資源として存在しており、アドベンチャートラベルの好適地であると評価されています。アドベンチャートラベルの定義には、もう一点、「体験により自分が変わる、自己変革できる旅」になることが重要な要素とされており、そして、そうした体験をさせてくれる存在としてのガイドの役割が非常に重要になります。北海道では、観光客の安全に配慮し、ルールを守って、環境にも配慮しつつ自然の素晴らしさをきちんと紹介してくれる一定の能力を備えたアウトドアガイドについて、北海道知事が認定する資格制度を2002年度から運用しており、今年で17年目になります。

ここからは、北海道アウトドア資格制度について、ご説明します。北海道アウトドア資格制度は、平成13年度に制定された「北海道アウトドア活動振興条例」に基づき実施されています(図-6)。知事が認定する国内唯一の資格です。5つのアウトドア分野にわたるもので(図-7)、山岳に関しては、夏山と冬山で資格を分けています。冬山の方が難しい資格になっており、夏山の資格がある人でないと冬山の資格は取れないことになっています。この制度は、今から20年ほど前のアウトドアブームに端を発します。「体験型観光」と称して、アウトドアアクティビティを楽しむ新たな観光形態が広まるなかで、度々事故も発生し、安全性を担保する必要が出てきたこと、そして自然環境への影響の



2019. 1. 25 自然と共存する観光 ～北海道アウトドアガイドの役割～

図-5

課題が表面化してきたことを踏まえ、アウトドアガイドに一定の基準を設け、資格制度とする検討が2000年度に始まりました。その後、先ほど申し上げました条例の制定を経て、2002年度から、ガイド資格制度として、試験制度の運用が開始されています。当初は、2層構造となっていました。5分野全体について、ガイドが共通して持つべき技術・知識を「基礎分野」とし、各5分野の技術・知識を「専門分野」としています。それぞれに筆記試験と実技試験を設け、合格者を「北海道アウトドアガイド資格取得者」として認定する仕組みとなっていました。

その後2013年に、資格制度を大きく改正し、4つの階層を設けました。当初から認定試験として行われていた部分は、現在4つの階層の上から2番目の部分として運用されており、1番下の階層は、人材育成の観点から、初心者でも受けられる講習のみの「修了制」。そして、勉強して検定試験に合格した人を「アウトドア検定合格者」として認定しているのが、下から2番目の「検定制」の階層です。その人が生業としてガイドを目指していく場合に、「北海道アウトドアガイド」の試験を受けるというふうに徐々に上に登っていく制度になっています。その上に先ほどの「認定制」があり、1番上の階層がマスターガイドの「登録制」です。「北海道

アウトドアガイド」のリーダー的存在のガイドをマスターガイドとして登録する制度です。このように、「北海道アウトドア資格制度」では、いわば、入門から免許皆伝までの一連の仕組みを構築して現在運用しています。

このアウトドアガイド資格制度ですが、問題がないわけではありません。この資格をガイドさんが取得するかどうかは任意であり、この資格がなくてもガイドはできますし、罰則なども設けられていません。そうすると、資格制度を維持するためには、ガイドさんがわざわざ勉強して資格を取得したことに対し、資格を取得すればお客さんがつくといったメリットが必要になります。しかし、現状、資格制度を取得しなくてもガイドはできる状況です。北海道を訪れる皆様が、北海道の自然を安心して楽しんでいただくために、北海道にアウトドアガイドの資格制度があることを知っていただいて、資格制度を持っている人を積極的に選んでいただくことになればと期待しています。

ただ、まだそこまでの知名度がないなか、ガイドさんは資格を取得するメリットが少ないと感じているという現状です。そこで、道ではこの資格制度のPRに取り組むとともに、資格取得メリットを最大化する「優良事業者制度」を創設するなどの取組を進めているところです(図-8)。また、先ほど申し上げ

**北海道アウトドア資格制度は・・・**

**北海道アウトドア活動振興条例**

↓

**北海道アウトドア資格制度実施要領**

**第一条**  
この要領は、北海道アウトドア活動振興条例（平成13年北海道条例第55号）及び関連する各種計画の趣旨にのっとり、観光振興をはじめとする関連産業の活発化とアウトドア活動の振興により、地域に根ざした個性あふれる人材を育成・確保し、豊かな自然とふれあえる社会づくりにつなげるため、北海道アウトドア資格制度の実施に当たり、必要な事項を定める。

**北海道知事が認定！ 国内唯一の資格**

2018. 1. 25 自然と共存する観光 ～北海道アウトドアガイドの役割～

図-6

**北海道アウトドア資格制度の認定5分野**

<b>山岳</b> Mountain Climbing 頂上から望む大自然の迫力。	<b>自然</b> Nature Observation 自然界の摂理を知る。
<b>カヌー</b> Canoe 一度は体験してみたい。	<b>ラフティング</b> Rafting 四季折々の川を楽しむ。
<b>トレイルライディング</b> Trail Riding 馬上から見る景色のひと味違う魅力。	

2018. 1. 25 自然と共存する観光 ～北海道アウトドアガイドの役割～

図-7

げました人材育成の観点から、人材育成機関の認定登録制度を発足させるとともに、有識者で構成される資格制度推進会議により、制度の見直しを時勢に応じて進めているところです。

さて、今回のテーマである北海道における生きものと観光との関わりについてですが、野生動物と北海道の観光客との共存は、非常に重要ではあるものの、一部そうはなっていない現状があることも事実です。知床財団が作成したこのメッセージカードをご覧になった方もいらっしゃるかもしれません(図-9)。ヒグマを見かけた観光客が、可愛いと思ってソーセージを餌やりし、それを食べたヒグマが味を覚えてしまって、人間にどんどん近づくようになりました。最終的に、地元の小学校に姿を現し

たところで射殺せざるを得なかったということです。観光客が餌やりさえしなければ死なずにすんだヒグマの話を紹介し、野生動物への餌やりを強く戒めています。夏の知床では、ヒグマを見かけた観光客が車を止めるため、毎日のように渋滞が発生しています。また、カメラマンが、少しでもいい写真を撮ろうと野鳥の巣に近づき、その場所で営巣しなくなってしまったといったことも起こっています。

交通事故や野鳥に関する事故については、観光客に限らず人間との関わりの中で起きる野生動物の脅威ということになりますが、いずれにせよ、こうしたことを少しでも防ぎ、野生動物と適度な距離を保ち、持続可能な環境を維持していくためには、アウトドアガイドが観光客の餌やりや近づき過ぎを防ぐ役割を担い、観光客と自然との媒介者となることが重要と考えています。

繰り返しになりますが、自然保護、野生保護と観光は、ともすれば対立概念として捉えられがちですが、アウトドアガイドには自然のフィールドを持続可能なかたちで環境維持していくために、観光客との間で仲立ちする役割が求められます。個々のガイドさんにとって、自然のフィールドは重要な「稼ぐ場」であり、明日のお客さんを案内するためには、野生動物や野鳥が逃げてしまうような収奪的なやり方はあり得ません。つまり、アウトドアガイドの活躍は、野生動物との持続可能な関係を築く方向に自ずと導くものであると考えています。こうしたガイドの役割は、非常に重要であることから、道としてもアウトドアガイド資格制度についてアドベンチャートラベルの取組ともリンクしながら、より充実を図るなどして、北海道を訪れた方々が、北海道の野生動物や自然のすばらしさをいつまでも感じられるような、国際的にも質の高い観光地づくりに取り組んでまいりたいと考えております。

ご清聴ありがとうございました。

### 北海道アウトドア資格制度のしくみ2

**北海道アウトドア優良事業者制度**

アウトドア事業者が、ガイド資格取得者の適正な人員配置、安全対策、備品の整備等、一定の要件を満たしている場合、申請により審査の上「北海道アウトドア優良事業者」として、知事が認定・登録します。

**北海道アウトドア資格制度人材育成機関**

アウトドアガイド等の人材を育成するために、北海道が定めた標準カリキュラムに沿った教育プログラムを実施している教育機関等を「北海道アウトドア資格制度人材育成機関」として、知事が認定・登録します。

**北海道アウトドア資格制度推進会議**

アウトドア活動全般にわたる質の維持向上を図るため、北海道アウトドア資格制度の効果的、かつ、継続的な運営に向け、資格制度の改善・見直しやアウトドア活動のリスクマネジメントの向上に関することなどについて必要に応じ検討を行い、アウトドア資格制度運営主体である北海道に対し助言等を行う。

2018. 1. 25 自然と共存する観光 ～北海道アウトドアガイドの役割～

図-8

### 野生動物との共存への課題

- ・エサやり
- ・巣に近づきすぎるカメラマン
- ・交通事故
- ・風力発電へのバードストライク
- ...

2018. 1. 25 自然と共存する観光 ～北海道アウトドアガイドの役割～

図-9

使用図版は全て北海道より提供

## 自然と共生した地域づくり ～生物多様性の「ゆりかご」とくしま～

徳島県

政策監 福井廣祐氏

こんにちは。徳島県政策監の福井廣祐です。本日は、「自然と共生した地域づくり～生物多様性の『ゆりかご』とくしま～」という副題を付けさせていただいて、ご覧のとおり4本の柱についてご紹介をさせていただきます(図-1)。

徳島県は四国の東端にありまして、北は瀬戸内海、東は紀伊水道、そして南は太平洋の3つの海に面しております。県土の面積は約4,100平方キロメートルで、その約8割が森林でございます。年平均気温は、沿岸部では17℃前後と温暖で、山間部では12℃前後と冷涼でございます。西日本第2の高峰「剣山」は標高1,955メートルで、4℃前後と寒冷です。四国山地の標高1,700メートル以上のところには、シコクシラベなど、「亜高山帯の植生」が成立しています。日本三大河川のひとつで

ある「吉野川」の下流域には低湿地帯がございまして、河口部にはシギ、チドリ類など渡り鳥の貴重な休憩場所となる「吉野川河口干潟」がございまして。こうした地理的条件や気候により育まれた徳島県の自然環境は、実に変化に富んでおりまして、様々な動植物とともに構成する生態系もまた多種多様で、生物の多様性に富んでいます。

次に、「コウノトリの野生繁殖と定着促進」についてご紹介させていただきます。4年前の2015年、徳島県北東部の世界三大潮流のひとつ「鳴門の渦潮」で有名な鳴門市で、野生復帰を図る途上にある、絶滅危惧IA類、国の特別天然記念物「コウノトリ」が飛来し、営巣を始めたという大変嬉しいニュースがありました(図-2)。日本では昭和46年に国内最後の野生コウノトリが姿を消し、平成17

### 本日の内容

- I コウノトリの野外繁殖と定着促進
- II 世界農業遺産－急傾斜地農法
- III 剣山山頂の環境保全対策と観光振興の両立
- IV 希少海洋生物の保護と活用

2

図-1

### I コウノトリの野外繁殖と定着促進



蓮(れん)・なる・あさ 2017年生まれ

百(もも)・歌(うた) 2018年生まれ

コウノトリ定着推進協議会 浜野氏撮影

図-2

年に人工飼育した個体を放鳥後、「野生復帰事業」に取り組む兵庫県豊岡市とその周辺地域のみで、営巣や野外繁殖が見られる状況が続いていました。兵庫県豊岡市で巣立ったオス、当時3才と兵庫県朝来市で放鳥されたメス、当時1才の2羽が徳島県に飛来しまして、その後、一気に徳島県内におきましても人気が高まり、平成27年の4月には営巣を始めたというところでございます。

そこで、同年5月には、地元の農家や農業者団体、徳島大学、日本野鳥の会や希少鳥類研究会など愛好家団体、鳴門市、私ども徳島県など行政機関も加わり、「コウノトリ定着推進連絡協議会」という組織を立ち上げ、まずはコウノトリの餌場の確保について、農地所有者への協力を要請しました。ドジョウやザリガニなど餌となる生物の生息状況調査、「休耕田のビオトープ化」など餌場の拡大、そして、見守り活動の体制整備とルールづくりに取り組み、何よりも農業者の継続的な理解と協力を得ることといたしました。

「コウノトリの餌場となった安全安心な農地」であることを活かした「農産物のブランド化」にも取り組み、平成28年の3月には初卵の推定に至りました。この時には繁殖には至りませんでした。これは無精卵であったということでしたが、その後、平成29年3月の孵化の推定、そして6月2日か

ら8日にかけての3羽の巣立ち、翌年の平成30年5月22日から24日にかけての2羽の巣立ちに結実をしたところであります。

希少動物にとって繁殖に適した土地は、安全安心な農産物を収穫することができる土地でもあります。鳴門市のコウノトリ繁殖地の周辺地域には、吉野川が形成した低湿地を活用したレンコン畑が広がっていますが、低農薬栽培への取組等が功を奏し、餌場が豊富な土地柄となり、そのことがコウノトリを呼び寄せ、「コウノトリが餌場とするレンコン畑」で収穫されたレンコンは、今では安全安心な農産物ブランド「コウノトリおもてなしレンコン」として、関西市場は元より、関東市場へも出荷が始まっており、農業とコウノトリの生息という良い循環が始まっているところであります(図-3)。徳島県では、コウノトリの初飛来以来、いろいろ観測をしていますが、2度目の巣立ちとなりました平成30年5月から最多となる10月にかけて、8羽から25羽、平均13羽と増加し、徳島県鳴門市周辺は多数のコウノトリが飛来する豊かな餌場となっています。

コウノトリの保護と観光資源化の両立に向けましては、農道への路上駐車による農作業への支障排除、コウノトリを驚かさないう一定距離を保つことへの協力確保、飛来数の増加に伴う負傷鳥の発生対策、電線など、人工物との接触による負傷を防止するための対策など、解決の方策について検討を行なっているところでございます。

続いて、2本目の柱として、「世界農業遺産—急傾斜地農法」についてであります。これは徳島県西部地域の観光地の写真です(図-4)。徳島県西部地域の2市2町では、「剣山に代表される山」と「吉野川に代表される川」に育まれた暮らしのなかで、歴史や文化が一体となっている、地域の特性を活かそうとする「にし阿波観光圏構想」を推進しています。雄大な山岳地形の「剣山国定公園」や、吉野川中流域に位置する「大歩危・小歩危」と呼ばれる峡谷、剣山に端を発し、四国山



図-3

地の深山を流れ吉野川に注ぐ「祖谷川」沿いには、「秘境」の雰囲気漂わせる谷筋が存在します。吉野川流域の人々は、山間部にあたる徳島県西部を指して「そら」と言います。徳島県西部では、一般社団法人「そらの郷」が、伝統的な農業や多様な生物とふれあうグリーン・ツーリズムを中心に据えた観光振興に取り組み、「田舎暮らしの体験型ツアー」には、多くの外国人観光客が訪れています。

祖谷川を見下ろす南向きの切り立った崖地は、高低差約390メートルにも及ぶ「落合集落」です。「祖谷地方」をはじめ、徳島県西部の山間部には、急峻な斜面に人家が点在し、最大斜度30度から40度に及ぶ山の急斜面をそのまま農地として活用した農法、「急傾斜地農法」が、400年以上に渡り受け継がれております(図-5)。平成30年3月には、国連食糧農業機関(FAO)が提唱する「世界農業遺産(GIAHS)」に認定されています。急傾斜地農法では、農地の表土が流れないようにススキを中心とした草木を乾燥させた「カヤ」を敷き詰めますが、その採草地では、定期的な刈取りによりまして、背丈の低い植物にも陽が差すことで、多様な植物に最適な環境が保たれ、282種類の植物、241種類の昆虫、また28種類の鳥類など、独自の生態系がかたちづくられており、今なお維

持されています。「棚田や段々畑」「急傾斜地農法の畑」における営農は、長い歳月のうちに独自の生態系を育み、その田畑は、生物多様性の「ゆりかご」となっています。

なお、落合集落には、築100年を超える「茅葺きの古民家」が残っておりまして、ここを訪れたアメリカ合衆国出身の東洋文化研究者であります執筆家のアレックス・カー氏が、「まるで桃源郷」のようだと感銘を受けたということでございます。また、アメリカの大手旅行雑誌、トラベル&レジャーの「2018年世界で訪れるべき50の旅行地」に、日本で唯一、祖谷溪が選ばれております。また平成26年9月の第187回臨時国会における安倍内閣総理大臣の所信表明演説のなかで、徳島の祖谷に広がる日本の原風景を「桃源郷のような別世界」と表現したアレックス・カー氏の言葉を引用して、外国人宿泊者が前年比で4割増加した、徳島県の地方創生の状況をご紹介いただいたところであります。

また、県西部地域では、地域固有のソバ・ヒエなどの雑穀や伝統野菜など多様な作物の遺伝資源の宝庫ともなっています(図-6)。平成30年4月1日には、「主要農作物種子法」の廃止で、伝統的かつ地域固有の農作物の遺伝子が失われるのではないかと懸念される方もいますが、「ゴウシュイモ」という独特のジャガイモは、伝統的料理のひとつ



図-4



図-5

つ「田楽の味噌づけ」として今も重宝され、浅漬けにして美味しい「美馬太キュウリ」や、激辛の薬味“みまから”の原料となる「みまからトウガラシ」など、当地では代々受け継がれる珍しい野菜が数多く存在し、その栽培方法が今も受け継がれております。

次に、3本目の柱として、「剣山山頂の環境保全対策と観光振興」との両立についてであります。これは剣山山頂の木道ですが、「剣山国定公園」の標高1,700メートルを超える山岳地帯には、「亜高山性植生」が成立しています(図-7)。宮尾登美子さんの小説「天涯の花」で世に知られた「キレンゲショウマ」をはじめ、「タカネバラ」や「キリシマイワヘゴ」など、希少野生植物種が生育しています。

登山者が多く訪れ、一時は、踏み荒らしなど、オーバーユースによる「植生の劣化」などが進みましたが、平成5年に剣山山頂に木道を整備いたしまして、県の天然記念物に指定された「ミヤマクマザサ植生」ほかの保護に努めています。また、徳島県と高知県との県境付近には、絶滅が危惧されている「ツキノワグマ」が生息しており、環境省の中国四国地方環境事務所が公表したところによりますと、現在も15頭から20頭のツキノワグマが生息をしていると考えられております。平成27年7月には、トイレの尿尿による自然環境への悪影響を排除するため、剣山山頂に蟻殻を使用した、「バイオトイレ」、AEDと酸素ボンベも整備しまして、自然保護と訪れる観光客の皆様方の安全を確保したところでございます。

次に「希少海洋生物の保護と活用」についてであります。海洋生物を活用した観光振興の事例といたしまして、徳島県では、古くから「アカウミガメ」の保護とそれを活用した観光振興に取り組んできました。徳島県は保護活動に役立てるため、NPO法人「日本ウミガメ協議会」への委託により、毎年、調査員向けの講習会や上陸・産卵件数報告会を開催しています(図-8)。平成29年の講習会の会場となった阿南市の蒲生田小学校は、昭和29年から教員と生徒によるアカウミガメの観察をしてお



図-6



図-7



図-8

り、このことが保護活動につながっているというところでもあります。古くからの長年にわたる観察記録というのは、世界的にも貴重で指導者の鎌田武氏は、アカウミガメの調査・保護に携わる世界中の研究者に知られる存在となっております。

続いて、隣の美波町には、世界でも珍しいウミガメ専門の博物館、「日和佐うみがめ博物館カレッタ」があります。同町の大浜海岸は、昭和42年に「大浜海岸のアカウミガメおよびその産卵地」ということで国の天然記念物に指定されている場所でもございます。こちらも昭和35年から近藤康男氏の指導のもと、アカウミガメの観察が行なわれており、保護活動に取り組んでいます。この大浜海岸に面してホテルが立っておりまして、夜間、アカウミガメが上陸しますと、館内の放送で上陸・産卵の状況の案内が流れるなど、県内では最も古くから生物の多様性を観光資源として活用してきた場所です。

次は、「エダミドリイシサンゴの群生地」についてお話させていただきます。平成13年頃にオニヒトデが発生しまして、サンゴの白化現象が見られました。そこでボランティアダイバーによりましてオニヒトデを除去しますとともに、平成15年には「自然再生推進計画調査事業」を実施しました。その後、国、地方公共団体、民間団体及び個人が、「竹ヶ

島海域公園自然再生協議会」を立ち上げ、また、海陽町単独でも「竹ヶ島海域公園魅力化事業」を実施し、採卵、育成それから移植試験、増殖というものをサンゴに対しても取り組んでいるところでございます(図-9)。

地元穴喰小学校の教員や次世代を担う生徒たちが、折れたエダミドリイシサンゴを漁師が集めてきた海中の石にボンドで接着して、海に戻す活動を続けています。「環境美化教育優良校等表彰」では、全国からの最優秀校4校のひとつに選ばれました。竹ヶ島周辺の水床湾では、古くからブルーマリン海中観光船が運航され、エダミドリイシサンゴをはじめとする海洋生物を利用して、地域活性化を図っています。当地において、生物多様性の保全と持続可能な利用により、今後ますます観光客が多く見られると思っています。

最後になりますが、自然環境には、農林水産業の営みによりかたちづくりられ、維持されてきたものがあります。様々な野生生物を育む「里山・里海・田畑・水路」など、農林水産業の営みによりかたちづくりられた自然環境は、安全安心で持続可能な営みがあって初めて守ることができます。徳島県では、今後とも安全安心な暮らしの場であり、安全安心な農産物の生産拠点である生き物に優しい「生物多様性の『ゆりかご』とくしま」を目指してまいりたいと考えております。

以上でございます。ありがとうございました。

#### IV 希少海洋生物の保護と活用－エダミドリイシサンゴ

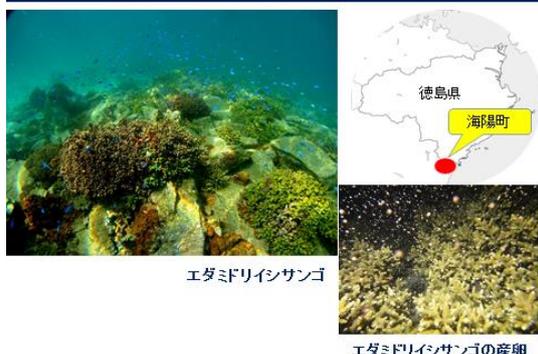


図-9

使用図版は全て徳島県より提供

生物多様性のゆりかごを目指して



日本の棚田100選「椋原の棚田」(上勝町)

## 総括

東京都市大学

特別教授 涌井史郎(雅之)氏

ただ今、ご紹介いただきました涌井でございます。本来ならそれぞれのパネラーの方々から、大変ご熱心に事例を紹介していただいた結果に対し論評を加えるのが役割ですが、残された時間がなくなりましたので、私はごく簡単にお話をさせていただきます。

ご紹介にありましたように、私は「国立公園満喫プロジェクト」の座長をしております。また先ほど、ANAの方からお話がございましたように、ONSEN・ガストロノミーリズム推進機構の会長という立場もっています。加えて、国連生物多様性の10年日本委員会、委員長は経団連の会長ですが、委員長代理でもあり、いろいろな立場からみて本日は皆様方のお話をうかがって大変感動しました。

なぜなら、2010年に愛知の名古屋でCOP10が開かれましたが、そのときの印象がまざまざと頭をよぎったからです。当時、生物多様性などの議論は、日本国民にとっては突然湧き上がったかのような議論に聞こえたわけです。92年リオサミットで決議された気候変動枠組条約と生物多様性条約というのは、持続的な未来を子どもや孫たちのためにつくるというツールになりながら、残念なことに、自然が豊かであると信じきっている日本人にとっては、生物多様性という言葉がピンときませんでした。

さらに、非常に悲劇的なのは、日本人が、再生循環や自然共生という意味で、大変な世界モデ

ルになる伝統的生活文化をもっているにも関わらず、そのことをいつの間にか忘れてしまった。しかしCOP10で提起されたのが、「里山イニシアティブ」というものでした。

平安時代の昔から、我々は、「おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行く」、子どもたちに物語を読み聞かせる前に、必ずこの冠の言葉を言って聞かせたわけですね。おじいさんはあれほど足腰が悪いのに、毎日のように里山に行っている。つまり、自然というのは手を入れていくのが非常に重要なのだと。おばあさんはあれほど神経痛やあかぎれができていのに、あの冷たい川のなかで、毎日のように洗濯をしている。これは、日本は湿度が高くて、少しでも不潔にすれば病気になってしまう。

つまり、厳しい自然のなかで、日本人が自然の恵み、生態系サービスを受けながら豊かな暮らしをしていくためには、そうした自然に手を入れていくこと、自然を観察すること、そして同時に、自分たちをその自然に適応させるライフスタイルをつくっていくことを、1500年も前から子どもたちに言い聞かせてきたのです。これによって、普遍の文化ともいえる見事な自然共生と再生循環型の日本の文化を作り上げてきたはずなのです。

ところが、COP10において里山イニシアティブを日本が提案するまでは、すっかりそのことが忘れられてきました。今日私は、アーチボルドさんのお話

をうかがって非常に感動しました。「環境ストレスというのをもっとも脆弱なところにしわ寄せされる」というのが、環境問題の定理であります。そういう条件で、ツルという脆弱なものを維持しなければならないというところに目を付けられて、この運動に一生をかけてこられました。その結果、この生態系ピラミッドの上部を形成するツルが、どれほどまで守られてきたかということをつぶさに感じ取ったわけです。アーチボルドさん、本当にありがとうございます。Thank you very much, Mr. Archibald.

その次には、ドイツ大使からお話がありました。とくにグリーンベルトに関しては非常にびっくりしました。そのなかで、私が里山イニシアティブと似通った印象をもったところがありました。何かというと、家畜の原点になる種をきちんと保存して残しておくということです。掛け戻しという方法があるのですが、例えば、皆さんよくご存知のとおり、沖縄のブタで北部農林高校が創ったアグーというブタがいます。これは非常に肉質が良いブタなのですが、これは絶えて久しい血統を掛け戻して取り戻したものです。いろいろな問題が起きたときに、原種を保護しておくことで掛け戻しをしていくことができる。いかに一生懸命自然を友だちにしながら、生態系サービスの厚みを増していくかということに対して、ドイツの人たちは、そうした原種をしっかり動物公園というかたちで維持しているかというお話をお聞きして、ちょっと衝撃的でありました。

同時に、ドイツも日本も共通して言えるのは、結果としてその森・川・里・海の見事な循環の形態、ドイツ語で言えばランドシャフトあるいはゲマインシャフト、地縁結合型社会とでも言いましょうか。自然と人々がつながることによって、美しく見ごたえのある景観をつくっていくという原点が失われているということが、ドイツも日本も共通しているのだなと思いました。とりわけ都市問題というのが、そこに大きく介在をしていますが、それに対して水鳥など

のバードウォッチングへの関心を深めているということ、今日改めて聞かせていただきました。

その後、全日空さんの方からは、ONSEN・ガストロノミーリズムなどについてお話をうかがいました。私どもは、このONSEN・ガストロノミーリズムについて、大変なご支援をいただいています。また、同時に、全日空の社員を地域に派遣して、地域おこしそのものにも実際に貢献しているという事例もあるわけです。まさに、CSRではなく、CSVと言えます。社会的な課題と企業の利益の追求を同じ土俵の上で考えていくのだということ、CSV経営の学ぶべきモデルみたいなお話をいただいたと思っています。

なおかつ衝撃的だったのは、モンベルの会長さんのお話でした。わざわざ実演までしてくださったあの演奏、子どもたちの写真を見ると、あの笛はさぞかし聴き甲斐があるのだらうなどの印象をもちました。深く感銘を受けたのがチェーンソーパンツについてです。私は、岐阜県立森林文化アカデミーの学長として、ドイツとチェーンソーパンツの開発をしています。そんななかで、今日は「なんだ、わざわざドイツでやらなくても日本にこういうのがあったのか」という印象をもち、もう一度考え直そうと思った次第です。

アウトドアの7つのミッションについての考え方のなかで、我々がしっかり思い起こさなければいけないのは、なぜ日本人は自然と共生する道を選んできたのかです。これは大変プライベートな話で申し訳ないのですが、私の家内はどうしても自然に見えるのです。なぜならば、自然災害の予測は極めて難しい。突然噴火する。これはどれほど優れた測候所の私であっても予測がつかないのです。このときに大事なのは、「しのぐ」と「逆らわない」こと、それから「いなす」という方法です。実はこれが日本人の自然との付き合い方の最も重要な技術の要点になっています。

例えば、木造軸組工法というのは、決して揺れ

に対して逆らおうとしない。これが五重塔を今日まで残してきました。それから、河川の治水についても、武田信玄がやった雁堤とか。水の勢いは人為で減じさせるけども、溢れる水は仕方がない、そういう自然観です。同時に、こうした適応方策で自然と日本人の暮らしが共存する。これを私は、いなしの知恵と言っているのですが、自然に逆らわないで、自然をしのぎ、いなしながらかき合っていくという日本人の考え方について思いを巡らすと、これが国連防災会議の第3回会議につながります。ここで皆さんの大きな関心を集めたのがEco-DRR。エコシステム使ってディザスター、つまり災害のリスクをリダクション、軽減しようという、まさに人が自然と向き合って来た叡智そのものでした。こうしたことに、いみじくもアウトドアのライフスタイルから災害に対応する日常の提案から喝破をされたわけです。まさにそのとおりだろうなと思いました。

それから北海道、徳島。それぞれの事例をお示しいただいて、改めて、これからはSDGsだと思いました。すなわち、持続的な未来を2030年、誰もが取り残されない世界を実現して、なおかつ我々が未来の取り分を自分たちの世代で消費してしまうのではなく、未来に対して豊かな生態系サービスを残すためには、どのようなライフスタイルを構築したらよいのかという地域づくりのご提案でした。

皆さん、日本の国立公園はすごいのですよ。アーチボルドさんには恐縮ですが、アメリカの国立公園は1枚の絵ハガキで説明がつくのです。グランドキャニオン、グランドティトン、イエローストーン、ヨセミテ。1枚の写真で、「ああ、こういうところか」と分かるのです。しかし、日本の国立公園は違います。1枚の写真で、その国立公園を語ることはできない。どうしてでしょうか。アメリカの国立公園は、ほとんどが公有地です。何を強調するのが自由です。しかし、日本の国立公園の大半は私有地です。ということは何でしょうか。厳しい自然のなかで暮らす人々がそこにいるのです。そして、そこに様々な

知恵を発見できます。様々な野生生物との共存の叡智が、文化的景観としてそこに残されています。先ほど徳島県の方がお話しになった三好の祖谷なんかに行くと、まさにその知恵を読み取ることができます。したがって、外国人の方に、美しい風景・異文化に出会ったという感動だけではない印象を刻むのです。これは私の友人が言ったことですが、「なぜあんな不便なところに行くのかと言えば、あそこに未来の人類の生き方があるんだ。モデルなのだ。それを見たいのだ」と言っていました。まさにそういった考え方です。

日本の国立公園というのは、そのように不便ではあっても、そのなかでいかに自然と共生しながら豊かな暮らしを営んでいくのか。経済的には豊かではなくても、成熟という意味での豊かさをどのように自然共生という思想の内へ築いていくのか、というヒントをそこに思い出せるからです。メインストリートよりも脇道に行きたいという外国人の方々が多いというのは、そうした新たな自然共生の文化を、日本の旅を通じて見たいというのにつながるのではないかと思います。

ついで我々は、社会資本財というものだけに目を向けがちでした。これに対して、自然も資本財であり、この自然資本のなかで回していくという、ひとつの経済的秩序というものもあるということに目を向ける必要が、持続的未來を描く上に欠かせないという点をこぞって皆様は形を変えて論じていただきました。

古代ギリシャ人は、オイコス・ロゴス、オイコス・ノモスを左手と右手だと考えました。オイコスというのはエコロジーの「エコ」という言葉、共同体という意味のギリシャ語の語源です。これに真理という意味のロゴスが付いて、オイコス・ロゴスになり、「エコロジー」になりました。他方、ノモスというのは共同体の秩序という意味で、オイコスにこのノモスが付くと、オイコス・ノモスで「エコノミー」、経済という言葉になりました。古代ギリシャ人は、経済とか

自然と共生するというのは、同じ人間の両方の腕だと考えました。いつの間にか、我々は産業革命以降、そういうことを忘れてしまったということだと思います。

これから、今日お話しをいただいた様々な事例を基にして、地方の創生を社会資本財の充実ということだけではなくて、自然資本財というものに目を向けながら、未来のための生態系サービスをどのように未来に継承していくのか。同時に、我々自身が、日常性の内で楽しみながらそうしたことに貢献できるアクションを続けるのかといった、適応の戦略の重要性とその多様な姿を教えていただきました。

改めて、今日ご登壇いただいた皆様方に対して、心からお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

(公財)日本生態系協会は、持続可能な社会を目指し、自然と共存する、美しく、心豊かなくにづくり、まちづくりを進めるために活動するシンクタンクです。アメリカおよびヨーロッパ地域事務所を通じて、国内のみならず、世界各国地域の行政や研究機関、NGOなどと交流し、海外の先進事例などを収集・分析し、蓄積しています。そうした情報を基に、自然と伝統文化など、各地の魅力を活かした持続可能な地域づくりの提案、各種法制度に自然との共存という視点を加えるための提言などの活動を展開しています。そのほか、シンポジウムやセミナーなどの開催、ビオトープ管理士・こども環境管理士の認証、ハビタット評価(JHEP)の認証なども行っています。主な著書に、『にほんのいきもの暦』(KADOKAWA)、『ビオトープネットワーク—都市・農村・自然の新秩序—』(ぎょうせい)、『学校・園庭ビオトープ 考え方 つくり方 使い方』(講談社)、『環境アセスメントはヘップ(HEP)でいきる』(ぎょうせい)、『美しいくにをつくる新知識—持続可能なまちづくりハンドブック』(ぎょうせい)などがあります。

国際フォーラム  
多様な生きものを守り、活かす観光  
地方の思いと地域経済の発展  
講演録

2019年3月発行

編集・発行 公益財団法人 日本生態系協会  
171-0021 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル  
TEL 03-5951-0244 FAX 03-5951-2974  
www.ecosys.or.jp